ル 4
1559

巻

前文

絶句の体継續をおこし給ふ聖代の
政りして当る紀書より此跡掲要なる
下志ある六無了ふか是まれ行わる事ある讃宝
はいと芳殿かりして太こち松やかに過候らく
人とものう数犯ほ不死又父に従ひ和の後て
ゆ彼りいとんれとれかる處さし男のよふ志う
歌う比しし義ねも不断々流うしつれ芸
たくひなお程やよりくん何の道に此道よ
毋見うかしゆる中小筆とれとはうる

ふしまろの庭れとしく行末つ德も忘る
よりくまされ心をも孫にてくれに思ひ入
如何あるりかしの屋まもの書よりとつき
ほと学を麗しからみと取あちてなりし
りやうしまの調あや清く末来に入にし
きん及律と書之にして古き流にをたく
書他をくれもなしもなし行れ琢磨等
行して近江なるて西湖の名流なきぬとに
筆法をまなぶら從しぬみやこ和ろに清く

ひとまうれ水茎の跡ひとりなしき見て
まく海つる筆作行取書取もの流くかし
二十年ころこえりし海てよまゝ経及れ
めいおくぬりて承家無りあへる弟もなく母の
たつ庵ははのめぐく第なよろ皇中なる
いまそうし亡寺として今まぬもなくす
みちをむすぶ路の志深まりて饑よ為にも
進しおり緒し悪つけ見犯族にあひも逢
かくりその後今もし母いと乞をたのみ

それハ此のみくしけあやうきをねんきこへしに
さ連ハこよ夜もかしこもけしきあかたしうら連
ごつゝみしらぬ筆ふでにとうのさま書をなんつ
道のさちうと名付る冊子なりけり今霜よねる
へは茶湯者限りともいふへしと智しはへるを
詞のいともあしきはたの何の寺く禮の社わり
つゝみて寶ともしてかゝる詞をけふ文書添て
しめとりて能詞書ぞうしみなにつて
ひ流連たるよしかしをもよ俗の勝手記し

つ禮ハ後の世津き屈んは師みこの事う
みどもたゞうものきれぞうち風く思ふとき
こゝ之禮連やうがいて其人と歎くはうへしそ
うるそ云ゐ流之ら佐連いかのそうは世探
如う流うる哉事好めるたゞひの昔哉世ふ系
ひさきなき如風よ禮お如しそその古備
おこもかはくきうをきまほしきとさ弁てこひ
ぬるよりきらはこそ抔うされぬ事ふも由なきその
こゝ哉くし見みとなんまうし正州の事なれは

いふもはしたなき深きこゝろもみえすいふに西尾
ふそかの里にすまひけるつゝく雅丈か世
かし今のけしきを思ひまさ且つ書これの文より
今昔考られたる後々の人のまよひをはらけ
或は海山の景色まよりて口すさみ遣しに
乃旅人のまても志るし得られ給ふ又はあや
しき夢の趣さ札かり眼前にみることし
まうてしてあらはしなから記すにも面白う書
み語りつか庵しぬする折ふしは此花こそる

よしのゝ山志るしてよみて来らなより
今はしかく年々梅庵に詞なりてみさわに
稟の白紙をけりてとしいなりけれし
也けり寛政六年青柳のいしも
於とらわなる所小野茂謹誌

折にある故四方の神祇に月乃比紫野大徳寺
賢要院といへるに旅しけるかたしにあれて上京
まつりたるし在京のほと住吉広行ハ也月末つかた
こゝろさしぬれとも三月乃夜食つまてもやゝおくれつき
よしみ内くの内さうハ河東洲あひの事をはしつかひ見
よりあつかしく何事けふにハたゝふかきしたしみにかてゝ思ふ
そのうちいふはしるすはぬれるやうにて祈えらる
うちぬきしに元年比の都乃ゆかしかるつねハ
はるか旅してもののかは旅の用意とも
また我も六日には御てならさきさつかへかならねさる

そても前程よかくハ物もし侍らぬや世
志満ぬしよこひ来りしハ乃りのことは二年餘わ
けふひらし秋津いそよ都を出きあつらの説
こあふれ古き筆乃跡うつしてまてまつ
まさのふところさ綿ハ志き廣行よまハ
そこみと思ひかへらるものと昔乃ハ
年月ものむかしのふところハいたく嬉しさる
とてこころかの心のかくまことしきハ
ころかし乃有籔見して今日乃日附てる駿河
基へ行ぬのこと然る山恵長もう地つゝ

出立人々むかふ乃さかせあにしそ品川まてきて見送
ぬ東も秋ゆくしとわかま来まし六ツくもと
かうまて年ほよりふ雨ありくゆる川涛神奈川
保ちうや小んそ坂ゆく不と並木てる松の根り
なふとなき草の露としみちかなく旅記
まんたらぬと流しやなるも絶よ流りもら旅
え西さしけうての塩なかりのよひハ戸塚よ由る
十月晦日のうち雨風に出しかりふの飛いりして
思けつらふ胡のまいゐ通れとも擢風に来ぬ面も
廿日さ通ハ宿かる亀というなかのの里て雨つゝ之

してゆく事みなしらつきはらへんとなし
こま遊をあとさかん發つ人こ清きハ夜須のうら島
みて行ほど池川紫師掛井通道ハ原のうら末
国画行あるの立し石又ありて名残空山と記し
て出あはむらへ人る谷をぬしたここにありし由の人なり
ころねと播所屋榜島入にいて行へありそて人杼る
と人はこえハ七月の清ありて其人りふ東堀太女
小夜ほどより海見えて行
あり立て貝や拾ひつ遊ひけるにいて浜なするはつ波
さしふ舍ん宿とし手と通り平安能りて庚申宿にて

於し八関あるあるへし国府本郷国府前の宿
府津をうしなひしあ通りて庚申の也しを八和し
かし古楽寺へ参りてすくいの赤住職へまうで入道
ことをいそけハこハを酒匂川渡りにて三すち
あれより此それあ日にあわ大磯の人にゆかり山崎
あひハ小田原の松田某の家にゆる茂福野
晩月あるあこえの川つき由なしはら鮮まさせ
さるハ宿まとしとそ
十日卯ほど見出立人より あなにて道ゆかを
くらかれさひ世をはいとんしはなし 松ともこり

つゝいてゆく三枚橋といへる所にて衣あらふ女ありし
跡も又いもんとらにすゝみ山にそひけれはしられいとそ
くらより湯本志あか坂観音坂なとゝいふ坂ありて
橋ありさ沢川あり右よ志の和か滝とそおもしろくおつる
二すちありみなもとも末もさそふなる猿なとの名は
おひしりやすくも川又すくも沢ともいふよしさて
あけ女出ぬるとといふ谷あり由来を問けれと
いとふあ事しそ書もさそらに大沢くしもしらぬ
の石坂猿すへりとくらしたと之んとなし
ふるし口二子山ゆりとなりあまやしつゝなりゆふけれ

こゝよりこゝろさしやすうれは
あらくしかりし箱根の二子山なとなれはおりうけなつくし
左満如し　詩あり

函関

豈謂長縄繋誠才　童心昔嘗弃繻来
奄鍾衰朽君休笑　亦是主恩伝回

湖水

十里青山行平湖左半　空晴光接河深
倒影函芙蓉　帯着雙花鶴怨花猿啼竟
我回未続波俯檻照心拘

おいがたしといふ権現坂権現よりはへて関
ありて本陣に入晝のやすみしてふもとうざんしぐれける
平田石さりとしいづれさらひ上のくすし石山坂大が
もてきたれくすりかれさ山中ふじこたつたし
めでたしなる上長坂さかしや下長坂ふもとや小
ちぐれ大志ても清らか坂への山うしところも流
原なとを通りかしと思ひあしあふくなあるにかく嫁
通なわれにいうし気なるとよりの道けし
それハ馬にてあまとからの沙く
大石のみてはしはこ箱根山のあふきあれとさつはり

あはこ今井坂からくるのくしくん川へしいかほし
て黄うや之三嶋にいでけ伊豆箱根の境なり沼津
を通りをもしさゝあへかゝ通へ夜ともいへす行く
よる馬にかくゆくのけし見物しよはこたつ宿
十一日卯のきしめよ出立のみよりあゆみそれさへ
かしといそきてゆく原よりいりてはあまゆき
ちかりて嫁しもみえはいふよあと云ひ只つゝ嫁
いはしの雲の前見えりめつゝすこしゆるさん
それしか思ひふかくよ吉原よりいるは山のすそ
あるゝみへて目比ぬかの海しもさいつ瀬もあはし

目もはるかにかすみえて拙く
沖のかた海さらにいかにも見えわたりて當代の孫
老儒如し　詩有り

清見道中

浮來欲將雲松道越日有隣富嶽岡
嶺雪塩煙攜棲葉背送人來

うら波ふし川いとくやさ渓すり梅の如くなり
まつれたるめやさいと文字なふはことあるめ
うきわたり道迄いさ三つけて岩淵中の郷
七うん阪義つ子観の寺わたれて沖よりいふ

め道し今ハ三本の内蒲原田子の浦ハ汐道たりことあり以下と
たるのハ之由井東新川南金沢さつた坂なりしハ
いまさ出とよるものいふハ大とう沖津川又さすく
る川又ハうつし江川といふこもいハおこつよやと云
十三日卯の刻ばかりに出立馬にて行在さうりけさハ
いと霜ふかくさむけれえさし清見寺あなり
通りぬるハ陣くらくれんあやめもわかで三保松
松原もさぬ見るかたのよそにても通りて古郷
ほとハごた沼和かたさふいちの人庵原川風
るいかのくとあぬことも点川水あさうぬれて

まさしくもなかりし流なりとぞ　左ニ久能山見ゆ
又あり十七町山をこえて草なきの邪への道
あり小吉田府中なつくる山右ニ安倍川の
ながれもあくとり前あり右ニ手越の杜㐧川
こすちようりてこし右ニ桜山とて桃桜花多く
うゑ有る丘ありこれより宇津の谷峠をこえ
るき構まりこ丸子橋あり兎角矢の汗切坂し
さらに川うつの山いてはけんし道ほそく細いを勧こび
あはせられ
蔦の細道といふ名もあるなり宇津の山うつつに鐘か岳にかかる

蔦楓茂りし以てさむらひの道に抽とめしうつの山に入
先備ぬし詩にいはく
夜荘細径岌将回　巖頭懐古意悠哉
句当也　嘯杖　箸去竹杖伴僧来此来
又うたあり
都路へ今もかよひともありしや蔦のうつゝの山のなえ
岡部六弥太社あり又こ赤坂岡部宗川又り川見論あり
こうもふるを通りまりいは八幡枝宿る
十四日辰の刻に宿を立ちて卯の刻しめて出立せしに川
は満ちてましうらのなえとぞて　秋雨満とせし藤枝

うる旅あり　暁ハ馬もさむしくれハとまりからにあつき
浜田より馬にて川原に出まて八風はけしくてさむけ
あまりし駕籠にてゆける人ハまへんまいらせり
その日もおせて浜田にてゆけるさまを皆うらん日数
ふて渡るまゝすその先それとつゝきそなき民あや
うけもなきをあはてとふもさねすふこゝろせしもき
いそくるし　北風はけしけれはいとゝさむくて
渡り波もさむしさしかゝるをまさしもこゝろゆつやらん
地をそ
見こゝのちかねやいとゝ人立出て猶川まてる袖のこゑより

するか　遠山の見ゆるうあや坂のあたりゆけは左に
相良への道あり右のかたに島田ゆけるうあや菊川
さるハ昔の頃をさゝ川の流をとひきの里
さやの中山
かくて見ゆ人目をいつはりかくさやうに鐘のさやの中山
右に馬場あり岩淵の城跡の里ゆる備前といふへ坂かよ
めくらし山といふあり南をあつらし坂めくらしと
いふもし鯨のよりし所なりとそ八幡大菩薩乃
竟石とて赤くなりし男鯨の上にて暮石
おわくある人出まし消失かなのといふ

それ川なる舟さ掛川舟さき川東川舟ある七つの宮
袋井川合橋三ヶ所橋ありの坂なりけりしさし
河を大久保三本松まきてけりひハ人かの宿
此日浜川東の橋ひ旅籠のさるしるけのさハ
伺そうくハ川くらいふるの也又されといくつも
あるへしよに渠とまち世るハうしといへ也と上
さまてこひしくらく武蔵の後に渕なりしと見る
そのあるへ下海さしくそれなるにもも松の
並製をそまつきなかりし濱田よりの流人あるを
つきあつ尼る竜の下に東口川のあてゐさうなる

さあまて宿のこのこれつきしまうくさいありけハ
ろくよ人ひろくそひろくるそれか人よきるいとけ
道つきれハ丹後国あ事の跡力石村のなしてはあや
なそはあの内し歌の友と秩父坂東の訪母貴巡
れの好ここして此人つきくいふるに老人あるかよ
ていひろいとそろく扶ひていそいは文月此ひも免
つしく国を出て上野国よいくるましはゆうはるやの
風荻いろくまつひていえうまれハ七ゝあ小月日
ほいやもにも心なりしとそ妹ら三人とそ出しさ
そやのまつさるくいさりさるのしけれそ

なりしかて藤原の池より出月のなかそては
かしこにてこうしかれとめくらせし宰相と
なむ語らしなひけせんとなかれは江戸にありけれは
とく食をしてそ東へ下りてくたり侍る東へ板郡
人のゆきかひもなけれはいかなるにて海の道を
思ひなりてかくはせしを小田原の宿にて人々の
していさゝかの調度をもうりて文をえたりこの
ありつさにきよく人をとをさるに泣てなみしとて
かくあはすゆくゑのかいしけなきよしいふ駕
籠をきたるなるものひたくはこひて人にも涙をなかしにて

まそなかう海しくいかて かくまめやかめて
ものせんとけしてもあはれにおほえしまし澱茶なと
こうせう白湯もいかほとも出りかへし おてまも
かふたるとやいひけんとありし合せてまたね
十三日卯のとはかりに出立は雨ふりけりなをすこし
ふりて夕はされあの見附の宿にて中泉に
いたりぬ秋なりぬ陳屋は所の名主なる池田
とかいて天竜川に出二瀬あり今は東の方を
大天竜といふ西の方を小天竜といふ世なれてわたれ
中の町といふ所に出てから板橋のさい中也ときゝて

をかふ道に

誹いへる名所ありけん跡も京と江戸との中の町とハ
うたかハしてふ〳〵松馬込川浜松よりさ町也高井な
こそ有る林過て左の方に大なる池あり長さ
四十町廣さ七八丁もといふ馬士のかたるを聞し
その南に小さいをろといふ所に松の古木あり
大さ二尋はかりとてひさまたりとそ其のそら〳〵
井馬船過て舞坂といふ宿也くつまてある
あのけふしなり入海にて長さ一里半余り
海上は八十四丁ありて此ハいとよく舟さかえ

ふる波もなくたひらかにてみゆる　さかしかりし
の浜名大橋の跡なりとて

さし渡る浜名の橋も跡もなく昔に[illegible]浜を見るかな

さのみかわらぬ人ハやうかえりて浦々にて[illegible]
いるにさつえといふ物し出しいれたるをいひし也
其跡ぬしハ吉田侍従殿より押へて有し所にて
御国なる事をのこしたる由なる関所へ[illegible]
宿より入舟宿ひとしハ海道まはしハいつの時よりか
流ることて流らせしたひハふうつきぬことりよ
馬士のかたる言とさけんけの地のなかしひとまて十文字

より前に庵原を病されハ終身たうれひなく
左の山ニいりハ濱明神なんそのことをまつれるを
まふといふ楊梅さくる濱名の橋ありし所と
いゝつたへつかし左ニ入りし山ありて先ニ町
大倉戸元志すかむかしハむかし白須賀乃宿
ハてありし汐見坂ちかくて有之しより今の
所ニうつりぬとぞ湖ニ坂道いとよき所なり
山のよニ新居目ありての跡あり古ハひとく白須賀
ニ宿る今朝天竜川ニてうつひし石をとて
讃歸硯とおかつて彦輔しわみ好れハ路

かきて得させんとてそのまゝ筆とりて

飛竜在天遠歸循君之試磨墨能生雲

とそかきし

十六日卯時ばかりニ[illegible]ぬる猿か
馬場境川本遠江三河の境なりきゝさとる
立岩といふありときけと海つらゆきしかへりみんも
せす二川の宿ニ入ぬやうやう晴わたりぬる宿
を過て右ニ見いてつゝ跡といふありさやの中山
よりいつもひこえし山也とぞまた過ぬる火打坂を
の左ニいえや飯田いとちかし見る岩屋乃

よふも立像の仏立てありけるちいさしみち出
坂のよりめくりと左にそ旧しきさなりけるふくろ河
をいむきとしよ北のかたに岩の下たら今もそ
流れし名称ある其山凡一里余高郷路して
さかりの比は人々見よくとて吉田の橋にいたりて
又柳橋下より井橋ら橋さ小橋なとを過て小坂井村
ここよりおなしこの右のかたの初もの万葉のすめる
村をいとちかしけしあらの此の田をとをして来て過
さら町小夜橋國府赤坂をへ御油赤坂八里半橋
二川橋なとにかかりて表稲叫し詩家の

三河道中

神祖扶風沿雨路山河四塞見雄図
書生報国無涓滴俯愧肩輿役驛夫

我君の御彼岡しぬと今かしに過るてそかしこさ
東照宮の御威く之八日比もあめもきまつきつとあまねく
此ひかる仰ぎくまそあまねきに當けるとおもふき
御いさをしの末に迄て踊なる御世の御恵を
知りよりあしきそけ詩家をとふけ八今文微
こうあらくて

誰も今東て添てふゐや神の恵みによそ敏とそ
かしこき

薬の本尊薬師寺門前さくの曽山中東湯槙箱木
ある八幡宮いにしへ茂川とて宿の法寺ハ赤山明神をそ
右の山々結構あり宿と過て右の山よいてしへ
宮母出しといふ本あり赤き山に今も白き本
ふる所ハ宮ノ母堀しあと也とそいふに自然や川を
ふり吉田と矢作を出川と三の大河をみて
三河国といふなり也さらば八暮湯に中とかりふハ
うこの母の奉り地中の道ら近つよなかりし年まつり
麻の色此等の流らとりて牛の角ありしとしへ
させ給ひしら七川の事ハ栗田し水

くさの国のゆかりし草むすひして居ける人語
られぬ人を法家まへりしくて何ある学ハ物んよ
すうもふし大学の名のことんを入てよ大父
の思も似れ我のちそ家とともおこさせ給ひし
そ家といふあらもししら十の秋房ゆりのおひそ
ゆきころすりきのさあるそさうそ心もとなくや
おかしけん今ともそ漢の字なども行さの見しらす
かく学此本よ入ことのことを及ひあるまてやし出
されし後も執筆を役とせしをいたら思の始め
くさやとかしこあるかいもふらそのちりまさる

くふしきなることもありて此度しもかしこ
こともんいとかしけなく玉ふへりれし故郷の
う残遥なしてものうちにおもひつける
あしちかのとしく〳〵ここに洩れて君よつかふる法き
十七日卯のくしめに出立て明ゆく頃に矢作のきの
橋をわたるもうすく霜いと白くなん有り
心厚のくるまに波の作は矢作の橋よわたる折君

彦瀬如し

暁よ矢はぎの橋の霜おかたりと月影ふみわたるといふ

欲及紅楓入帝郷　晨行不厭履嚴霜
為韻小倉風葉道　留他婦人錦繡裝

大濱野池を過て右よ八橋山無量寺といひてい
まくへのやりそしの古跡なりよしきけと
まうてゝみしのとしいとうけるにの不のさる
かり池鯉鮒の宿を出まして池鯉鮒の神の
社あり過てぬくるさ川あひ妻川一里山今
岡芋川境して尾なん三河尾張のさかひなるあの
橋あれ此坂前後落合まて松なき橋ひとよ右神宮
の遥拝所あり中きし川鳴海の宿此宿中より
右居なちて正一位成海神社とある額かゝる

うつくしみへぬと文字のすかるハ長田氏兼雄
なるやとおもへる小坂をあかれハ一村の家居
まてその中よりたつものいとなまめきてぬるまうる
神垣ものふりていとうるはしく末社もおほく
破壊したれ壇つきて幣帛もありてかくく
橋立る村をよ通山寺の橋いと古くいかにも珍希の
遠目なきさんたる橋也熱田宮の入口也此
欄干に銅のきほうしありそれに記文ありて
まうてみきこえ熱田宮裁談橋右檀那意趣
者堀尾金助公去天正十八年六月十二日於相
州小田原陣中逝去法名号逸岩世俊
禅定門也慈母哀餘修造此橋以充卅三
年忌普同供養之儀矣とあり又かなのかた
にかなにて天正十八年二月十八日にをたはら
への御ちんほりをきん助と申十八になりたる
子をたゝせてより又ふためともみさる
かなしさのあまりにいまこのはしをかける
はゝの身にはらくるいともなりそくしん
しやうふつし給へいつかんせいしゆんと後のよの
又のちまて此かきつけを見る人ハ念仏申給へや

卅三年なる也と云へる梵字を三津川の
梵字をあらはせり弘法大師の作と云へる大なる像に
ていふもなみならぬ様相なりとはいへとひたいは宮の前より
御かたはらに鶏の前にいふつきた石神宮の
鎮座御しませはあさなしして宮の前といふ
よしなり
十八日宿のまへ出立して向ふきはんを廻りて
新宮町と云へる尾張五女子（ゴトウコニヨウシ）橋あり二女子橋あり前に石築前あり烏森（カスモリ）
岩塚万場川あり万場上は本名八万場下は本名八万場あり岩塚より人馬をつたへ新橋此川は七つ橋といふ
砂子村右の方にはへんかはらぎ村ありそうしつよ

須はま村ありて云宗の妙行院大智坊某
姿想して日本を出し眼病の療治をよく人見る
しまの国医師の浴場なりとて廿町ほどよ文平村より
薩摩の名産と畑をせおしのうち也とて松並の縄
まあり松葉に横手といふ所より北は松葉村まであき
なけ村中よ松村舟道小橋多し下田村右橋三つ
こそあり先も遠く流れし川也といふ神守よ
つくりたる橋あり茶店あり追分橋詰に道津島牛頭天王の
みち也西のかたにみゆるは多度山と云へる南の尾よ松
すこし見えたる権現の鎮座御しましてあるなりとぞ

鳴海宿本陣に入て昼の支度を屏風に梅花源元
章と云人のかきし梅あり彦輔ぬし 筆をとら
せて賛を乞
十月朱須長亮信入門忽懐旧来
石道籬下尋得去為得臣屏梅花梅
わたしよりこゝにて松花堂がかける画など出して
見せつ又屏風に茂木一流の書などをしけ画て
是の程六里ばかりといふ道より舟にて木曽川をく
だる部彦ぬし尾張西郡公のまうけさせ給ふとて
やりつくせる松備りてのる也川まいてかで七里
舟納るも猶さらひて八ちの路まで出ぬれば
凡二里ばかり小風なけれど吹出ぬれば右の枝
川にさし入暁かけてもしらせあり又ま見そこう
過て桑名の城の石垣のもとを漕て岩につきぬさ
ほひいはふ中なる光より伴蹈なる風俗からめて
ここに彦浦ぬし 詩あり

尾張侯賜楼船下木曽川

下水楼船寵旋程 豈図異数及儒生
畫旗影靖淵龍舞 鼓轂傳洲鷗鷺驚
十里練光寒象静 西山留返夕陽明

棹歌唱出滄浪曲吾黙餘吟思渺綿

幕府の御使なりとていつくにても国の守よりさし
おくらるゝかゝる庵痛ぬしいとかしこまりみえけり
まて

無才無徳老書生　王事靡盬祗役行
恐被舊濱猿鶴笑　路傍唱道且低聲

とそさゝやきし

十九日卯のくしめに来坂をたちて蛛のもとを発へ
くりゆき町屋川をわたりけるさ村より川かとも通て
朝明(アサケ)川渡りて杖ちのもとあけ也

きゝしも蔵の何某にこえ四ヶ川の名にめでゝわたり
こゝ田にて焼蛤名ある里風味名高なりけれ戯に
御老のとらまめの蛤をこへさ給いとおかし食て
茂福(モチフク)米洗(ヨナヒ)川やうつろのゆそよめなとなりける
二重堤こえつや海蔵川こえ三瀧川四日市富濱田部のめくし
赤堀落合橋のえけてし生田橋てんてく橋文橋
けあかりを日永といふなしさて
女をあめて五つ猫石てるなりて日永の里の名をそつくれ
追分左は参宮の道なり小古曽小萩田中杖つき川
杖つき坂采女大谷小谷石薬師宿共宿の中なり

日本武尊陵への道としるし石文有り諸方
用ひられし道も埋れたりしを今は此宿より六
高富といひけるを弘法大師作石仏の薬師ある
故かくよりつゐに宿の名におひけるとか川
中の橋を此右の山際よりかさといふ村あり
しは道の人まよひし度くの沙汰にやうく此
うつりて今の所にかはりたりといふ庄野橋を家有に
物見山三田村野と云もの宗の猿舎あり東路
おもしなる鈴を鳴して歩しもあり椿原にて二里
又日く ぬりてより頂きて本町あるとかいふ ならも

伊勢の国にて行まゝに橋わたりあるは川といへる川
の末也といふ又せき川ともいふなりいつゝ川なとゝつね
わらあひてわたり毎ふりて水きはまりぬるなりといへるに
川のなはあらく ちく川のなはいろくなりてなかれ
あやしといへり庄野宿を立て東に森下西富田楽川
といふいさんし川合橋本のありに左に神戸白子なと
山のあなたなり村右に古城の跡あり東に六のあさ
八町の松原といふをさるは本はなく固もなくて
也本幾木の松の三本あり今もあしきの
さなきも末の石ぞみる亀山の宿にいりて此処

十日卯のはしめ出立　野村姫鹿藤針せと川の橋
をわたりて大かうしなハて西がたあるよしくわり
西山乃風にけし歌てきこゆなるよし小野わ
小も気宮の後ありて開の君古跡廉の跡ありと而
天宿より宿のうしろよりて地蔵堂あり道を
右は東山といふ石多く松たちならひたるまこ山
あるめるかりハ上は東石の下に大そ石ある道わけ
はしりつても山は紅く西移してそれるよ
いかれハ谷川のさしより山は五ひてあな方の景ふ
立よられ様をかくちつらん旅をいはしめつらるて

海ちかきにみわたりても見てしかな谷より岩の紅のけ
山藤花のかりいそえ右は草すて山あり山のかなき
あしきにうつきて夕よりそろへつうつへしこめ申しけれ
持姫古法眼の筆すてしよりむかしよひならせけや
いく八滝ところにて市中き前にれともみえ
おしも村しるし山めくりしてふりこふるさ
めかなれ
うつしはじ筆すて山の村しるしつくすそれ大道阪ある
けるをくられハ安たえの案内をしの谷川なそしけ
ふるしたかに秋をたん新あり山川の名を過て坂下宿は

いまて鈴鹿のふりし地蔵を見て泪して別し
石像の飲者静玉分と出世せし本なるおそき滝
おち落つ一見飲者消臓疵乾と見えける碑あり
けると過て山をたちけるかの谷川の流者すこしく
ここも長のけりきこえ八萩根よもたとし八鈴鹿
往復志つかいさえよりて皆つきぬ川ぞき野鹿子て
おのれるとのそこし付をきまりて夜を催けるさる西
いまにも西風よめひつくるたえしかしすゞか山
あふり出て風さむしこけしたるし武者のやみて道
とあやしまた思ひて常にめし川ゆえし夜も

ゆく山立出て行て風も吹出す
　西ふも女かり自之妹すゝみ風も見えて座すくかぬる
馬支ともの坂はなかしとうかひつまで見返す老婦ぬし
坂也照々鈴鹿陰八十瀬川浅也源
東西南小家何度去々家々歳歳心
里の長部の老婦ぬしとのんこうううのやけおきまゝ
又茶り始といひけれは
　嶺翁頭白依舊嶺忽策青牛度碧山
　爽路山竜齋抵掌指道嶺翁又入閑
さめぬしい旅をみえ久しく住居をしれさまでて旅は

坂にのぼりて東ハ旅のこゝろや思ひ入れん
橋をわたる旅人ハ白雲の行らめ いかへ人路ハいつへ人
家を出すさ阪越し 鈴ハ伊勢近江のさかひ也
されバ伊勢のかたへ見えわたりしとぞいひ出
道をうかゞひかし

いにしへ此鈴鹿にすみかをしめて人をなやますことよなし
くろうしハ坂路なのかたにかりそめに住し山中にゐる石
なのるよし 鬼神のすみし跡をたづねて山深くして
ふかく入りてもおそれあるのにてあるより坂田村川にて存す
田村将軍の神まつりしまで 山ふかきに

社頭ハ谷川にそひて 心すゞしき神さびたる也 中々
つきそひて別当神宮寺も立よりて縁起を問
けれバ弘仁二年の法度にて本地観音菩薩なり
此所に寶物とて大刀と畫像とをもてしと
取出して見せまゐらするに刀ハ白さやにて長サ三寸
も摘ちぎれて赤さびしかりてあり銘に字あれ
ども年へて見えがたし下の二字ハ定利
とよまれたり 畫像ハ田村将軍を前に等を描き
その二人前にあり 衣服をもつてかうけつ
かたりよき色のりハ あざやかにて文字も見えず いかに

古代にもみえたる山宿なる正一位牛頭天王といへる
いと社勝なる額を居まつり掛りしときゝしみえし
うつさ西向かりつゝ道を西へ出めでたく見えひかりく
たる也松尾川をこえの左は湖東右は大地にてき
村也右に布引山左に神居山あるに三雲今宿
いふ川橋ありて東京小室新庄右の山をはなれ
京清かたへ石部石部へかたへ石といへる又
三石のちに舞姿か指して示然るきしるし
し文岩神とて大なる石を神といひ祭るともあり
栗林月かよふてこそ水口の宿ありしろに加在

清正の城跡あり宿の中に圓寺の観音といへるあり
て縁起などみえて観音は甲賀三郎兼家が守り本尊
一寸八分えんぶだごんの像にて今は石像の胎中に
納て秘仏とて別当すら拝することなし文禄長ゐ
が海北の絵に図るの唐室にして和売こころしとなる
げ示めりなとうろ本堂には大岡寺といふ額を掛り
何人の筆にやしらず人は享保の比輪王寺の宮の御
筆やとおもふに昔のひとの説に申せる
廿一日こゝを出て水口泉をこえて田川田川あり川
よし水なとまあるによさは道もしられはそれ馬にて

ゆゝあり霜ふりてさむさ多くなりし
乃ち翁の許に書送て神の子ならて霜さむき旅
あかつき
なつとめて村平松らしふらふ名にと許に秋あり田畑
法華寺川にそうて石翁乃名也者を出かけさ山二上
山とてつらなる山のきよらかなる所を中し上野六地蔵
なと過て栃の木といふ所より和中散うる店家あ
りせきいふ宝蔵なとといへる寺の目来右のかたより村
宮村といふ村なとありてそれより川川つらなれん
ふくら目川ほとりに菜飯うる店ありしに戸ゐくらも
夜明るの頃なるもうけゐかめ川なかやすみして人出

札のけむりハ見とらつせるなりとて在り新居浦
草津川をわたりて草津の宿矢倉野路ちかくの五
玉川なる萩ありて手に馬の口とまるそのよとえは
水上此園よいとおほくありといふ
秋なふ萩のさかりも見え満ちは菩提き姥が餅の茶
はかこうは瀬田のめ川月のもの説大江とよき京に出て勢田
に出大橋小橋とて二つありなかれとくそらもうなる
またなかりなく夕日かなやふみえれまてかれそ
雨さもえれかまつてかち人の夕日をかぞえ此長橋
石山よもまりて紫式部のかしこくある寺にて硯

出崎の大般若経光院に立よる 縁起によれは仁寿
年の比より有門世に出て赤き雲の兆を沙門心
らぬものなりけるにこそなりけん所のものにとひ
たまへともいまたあらぬ世ともなくてこゝんまてめし給ひ
ぬ元をぬるこゝに近ともとかうも見るにとあらん
庭に出て雪つもる民家の高根矢橋の帆かけて
下向しけり 粟津に原義仲寺石場にて大津の
荷によせてれけり つゐに教ゆるは都に入にけんとそ伝へる
つゐにそひ行所より叡浪野別れて 花浦ぬしの
りなる消息ありて辰のとりに着ましとあるよし也

りふ道にて侍ることのやさしさはいかにおほへけれ
花浦ぬし

閑邊洗路浄無泥　柳渚松湾信馬蹄
休怪郷村語言好　里別近在彩雲西

廿二日卯の下りやよゐなりて出るに道あしくなれと
とて 馬にてゆく

故郷といふ所にてゆるき大津の里にいなかにまかり
世あらの下の石に心をさしてもこゝにて近江山城
のさかひなり 篤竜はいつとても馬にのりこゝまてえけさえも
おられつゝ心よりやまてこゝに及あしくて馬をすゝ

かくれて

引返し詫のかなき大事つ心にかゝる道のたよりけさ

籠の下奴共や目の圖にかゝると我ながらも心を返して

かくしてけるあいだにて出ぬさらそ孫のかくとへとし

あらためてあやしみて庭のとなりより地形の鈹

みすいかぬ此度の家よりそれ上京のよし中入て又

三浦殿よりも消しさぬよもの和田代佐々木侍従

とのまゐりてもそれよりも入て本陣寺のうちなる

おりは院といへる様君よりたのみてあまたたちつ

きぬ久我やけの所のあひ備えて本つへつ長袖

ねしの申あはせしめ孫もまちかねくおなく入

させあはしろ為房負輝ころさせ人あくとて

三条の様のあなたよりてあひけ先人同きをさ給り

わたりしより又あはへしと思ひも有きをしか

ぞて許つまでく二条のおはしまさしけてそここのゝよ

くそぬ藤扇へさも又えさらてさるに給はれとある

多りあのもひは女きもまよつゝてかし也

卅三日ハ大いに朝ゐして殿御出て御前服藻る両袖

織女神ところあひさつきみなりいさての御ち

あしくて物うかりしに来の書のくあけまへしく

あかぬ迄一人負押にともなひて大清水住吉庄屋が
旅宿にゆき　重頼ある俳諧師とて人の謡の本とふ
ことつてもなかりしといとすくれたるけのゝしくり
ことてありつ　狗児なりのさかもの故実わさやりそて何の
御造営も十餘年にして出来再興ありしけとなれハ
三條なる一條ゑゝけて諸人の見物にて中々尾張
維新既徳新日記座處ハ天下の一名物なとよふ負擔
ふかれ中いまして参る事もかれにかゝりにいつ負擔文
ことて拘泥て
廿四日廿日山へつきて一ト気より　堀屋茶文三本小所蔵

東ねむらつしより住吉内記が旅宿に申て為家卿の
人丸の讃並家の定家卿の讃らつし申して判者ゝ
俳諧の詞書ハ山家之とうよせて北村季吟より
旅なる南に校合しけり
廿五日より　西にゆいありして辰の刻にさくらかれ
ゆるゝ乃さうて　野村よりう年来とありて判形五ハ
東寺の宝蔵備正のうつさし　弘法大師乃自筆を
三巻渡さる讃もしてえり何般の手紙つきそらつし
表によりて座敷ある説ありとのゝ筆二枚うつしつるを
是ハ定家卿の像よそひける文字なり

廿六日御即位なる又みちかれたりいとさかしうあさもとにし
めてたくも大臣の出うちて東下殊に入道よりも始る
継きたる御人は順徳院の末孫にて侍りけれは京
しらぬ人にて御衣をもたし世間にもおのひさらめ
ものゝやりもきこえ古き儀を承りつて明日のこと
なきことゝも拝されすも京なきぞふきゝなかし
あまりけにおち御ひ孫の義に実雲隆にまゐる
承りかゝてかくしとのあくるよいと今は少くのき
しけなきたる人もなしことは白き雪衣を
うしあふのさしぬきさうらふ蔵人のおもせうこもち

させ給ひて陣の座に世隆に左衛門督 宣仁
門 国陽殿代軒廊なとおしくて竹の節會には
かくこはいかにこき陣の儀えさう拝してあとより
さうすゝといとうれしく立つに立て拝けん紫宸
殿の池のもとにて弁官のおまへに参るもに御前儀
の出ぬる例すくなくきこえありぬるへくのさて
こゝまこそは日は殿上にて御侍に日給の御簡をとり
蔵盤もすへてあり殿上あまたありの服衣ぬきうて
あらそはつるふきみかけなしと呼へしも五位蔵人
の大位にそのなしかとひこそすなそろへし さも

姉しさもたうときもうしけなきも　つきなおなて
みるいそのうへ流くすへきことあるへしよそより
時雨めくなるいとゝゆきくもり　富うちつゝ采桜の
枝よわきにみえていとめつらしきわらしわれて
あさくともふかくみて雨陸にかゝりふ九重の庭の秋富
みなそのはめつらしきわもわき富ちかる九重の庭
と心のうちよおもひつゝ南殿よの御遊を聞おは
としめいしての人々届おほえ噴聖陵よと忘と
こそしなせそあはれそきこえけり色にそときとて何
くれとせいしそのせい奥のふかりてかひなみ

しるしは中殿にていとゝしく念法師とありけるし
持明院前黄門のかみのかきを治する年中行事の
障子よりなるもとのに御硯もつゝきいまいん
しこなかしけれるや御硯にふく御筆なともも
なしおもしろく御装束の天暦しるしとおほせ
うちの人々あつまり出しゆゑをそなへたる九重つとひ
出袖をさしてもととろつき内侍所かんまつる
色なとおりくたるひのやとのよその轂枕ちかく
おもむくさかみえてありける
廿七日こそおそふ後よりふるも大将の参らるゝ今夜

栄翁より女房御来会子仙盧来る
廿八日朝くもりたるがはれて大師出らつきて霜ふ
入て住吉広田金子仙盧岌貞辨来る宝の
小路因而持明院家広行長将任のよしきこゆ
廿九日空晴て朝さむし昼わくらも也雨勝院宝鏡
修来備後国所医師中山元倫阿波国岡本屋
西尾源右衛門来る兼輔のもとへ山中氏書を栢通て
やく
晦日西山社家山内伊豆来る　新撰字鏡かへし
約説を

十月一日空くもれりしくし也勝院宝鏡御内勘兵衛来る
あかて来る時雨ふる大師の出らつきりて
二日空くもりくる午の時より晴かゝかり丸山
主水参角野岌宮部来る此ハ秋の歌英
長頭詞出させつゝ詞序蓮法師の筆也絵見え
とひつゝ又たれともさらに分ず
三日空くもれ北風寒くていとさむし夕方東方へ行
出雲親盛子入坊宮様御下向也次大外記に行て
広橋とも参らる住侶文殊院出来御門の家録を
ものゝ法大師の読来の　七祖の像を

大師の飛白ハ世にしられし題名あり又小傳もあり
傳教大師へおくられし消息の中に七祖のうち
五祖ハあらたに人の筆第一龍猛第二龍智
大師の筆とそいふなる請来録に供奉丹青李真等
十餘人と申て曼陀羅并に五祖のつくらせしとみえたれハ
此像もそれにて是唐のものの手にやありけん消せて
すこしあやしきものゆへ高祖のうちの龍猛龍智を
せられたりていひたりし文飛白ハ世にしられし題名
とのかゝりたるものまてたらしくゆゑして点へ五才
書きしとて宋の仁宗の時唐代いふもの三百点を

擬わて書き分けて先殿威ありてさて清涼の二字を
書て揚りしにさしそのかのすみゝととられけると
いふと御田録にみえけることれハまらよみともえらて
五るる点畫を指摘せられ如ヽハ之をありもや文
古法の請来録をとこし御よ作りしの曼陀羅一鋪七幅
くゑしの新一鋪三幅とあり此鋪字を幅字との
いふあやまりしけ此五祖の像とる文字ハ皆二字を
つまて一幅としてありける請来録ハさしも記して
一鋪三幅とありる分くて一鋪とハそれ世よはふ一幅を
三幅とハ三のといふなんそさて又此像を淨莫

上人のうつされし七幅あり題名ハあまたしるせりハかし
花園も人事にてそありし消息にて甚よりてこそやせる
大所様よりハあり次唐人の筆也跡よ寄なりてこと
めでたし十喩陀羅尼讃表八幡宮の額なりし
も古跡にてありし紙に板と紙にてそのうつし中
達あるを由さき雨大内裏庭門の額もうつしやされんと
おもふも勅智院僧正様もいろよりのせらる貞経うち
しし之道者出人もあらん鷲尾故大納言の子息の是
人のいとあそよのうつやうにてさりとおほも数庭にて
さて淋宝あるを家々此僧正の時迄ありなり筆の

道々もいと多かり　又数座ありて古文書ともこう
天平の法他家の名を伝りてありし花払ける
初て七十八部書写しける七十九偏ハ一切経ハ
古文書百合まとして事とそう詠歌見ありつゝ
日前にて写し
四日より五気まかあるこしりしゝ在世之行条識為長
の筆痕隠三昧寺とよける額あり要和元年の銘に
先ハ毎巻念仏会よりつとらハ忠宗形といふ硯あり
或人の説よ此硯ハいつの比よや地中より堀出しけ
ちうにて堀取りしその出人忠宗と思ひよりてちや

う忠義の文字をはなれ法華経といふ業へ長柄の
くしはしらて造りけるよし元禄二年小室直良と
いふものか寄附して作りさいらふ帰りて又ハ和泉
武羽集からさまにあらんかあるくとある人くそ
何年にか持操役より三ひろ廻ハ順和名抄によるに
ときこてある金鼓を長寿ふて唯しあるときの文字に
ことなれ何事といふにとさそらゆきまへしらし此経やよ
奉鋳顕金鼓一口と彫てあり是をとそまへと今ハ
解ものといふこその意もあきぬるいとあて尊文遍智院僧正
成賢卿の悉曇字母ありて是を清人の手にて傳へて

ありと又曰醍醐寺座主成賢僧正権中納言藤原
成範卿男少納言通憲入道信西孫應保二年生建
久四年五月廿五日任権律師廿二歳正治二年十
月廿六日任権少四十歳承元二年三月廿九日轉
大四十七歳建暦元年七月廿日依雨之祈勧賞任
権僧正五十一歳寛喜三年辛卯三月十九日宗七
十歳号遍智院権僧正又奥書ありて冊一巻遍智院
成賢僧正乃自筆也雖累代相傳東大寺持寶院
今度以上人師資契約爲法流繁栄不一巻令讓
与之者也永禄七年卯月吉日僧正亮恵史より菅大臣の

宮に備忠也孝之所なりや上人所持七枚の床の間あり
光かん加茂家の筋にみへし上人のうけられしめ
あらふれの三昧しぬるみるその傍にいれまいらせ
くうけるまき西にもなかりきしきにものかの飯ハ
絵ふる書の頭を一るそいと見せしあり名有さ
也あるて西尾新右衛門にあひぬ大念寺に愚住する
まし寺寺であひけ見れと宿にいる自解ある
所て都ヶ乃杉をとる内膳司ある事ぬきに封の
西をに尾崎りまいらす動きてこのいまゝと
貴きる諸杉二杉ききて一川しし也へふし

納め置たるは内膳司代西勢也とも蒔絵硯
延慶年中の関白冬平にありしものとも見へ
夷の時まて世に久しく家
又日蔵くりまふりして智恩院へ行　円光大師絵詞
数人筆之古法然上人詞ハ伏見院後伏見院後二條院
宸翰将治海三條実量卿青蓮院尊円親王世尊寺
行尹卿同定成胡に姉小路済氏に筆加へもあり
尊円親王にて法然上人行状画図と世のひろく荘厳僧
様あり其外見賢之冊にて安井道恣僧正筆ほか
数も同年にありして紙字まてあり絵初二三巻ハ詞ニ

あるやら南道を汲ミえ業もつかりかた趣也世に行
かくれ柳おりて引合されハ冷根なかりに赤遠路り
いふしきる寺僧に問つれは南麻の要流なと一部
侍りけれとも、うつかりやとあて又東人の
草とや浄土の祖の像あり絵伝にみへし僧栄房か
渡せしハ浅縁の二尊院小あるとききけとのつかるか
あるやりふしかつきに清水る祇園なと彩に見侍りて
東福のちかくの業北恵次郎なるしまうけて
六日ハ入りかる南のかたハ御霊へ行神事を見る
諸寄に又ひ夜肉をもと三つ又うつしそす

七日ハ空はるゝときゝしふ又祇園院へ行 行状の頭出
うつしまそれなりに久しき秋に入給中の人西山寺僧
あなたに故郷より消息あり
八日ハ東行くとのつ北風けしく吹ていとさむし
朝発能別の鈸にて行て久しふりに人にて加茂
まうでて国中黒髪当山中黒髪様なるなとひつ社に
ねつまいて若りとてしもとも行列のもうらうらし川
ふとみえめくりね黒髪様当ハよしし一とをりて神事
のよしにて門に神事札とかけるせたき様に
神事や僧尼ハ浄くし是迄入門[illegible]とかけてあるやも

さて入んとしけれハあやしふといひてあひて両さむ
こゝろあるにしたかひて白きハ老人のけふ入西前し
ひとへの羽織袖のあこさをつゝみける肉燒とゐ水なき
てあ社とつれ見物往かへりすく二度ゆきめぐる
よしやなれぬとみてこゝしぬるよしいみ居せ
つる迄てみるあもけふとあやうう早総らハ肝経
の不背みて引たりうぬるよしあらくのるハよくさ
修道とやれ人をも思へとて病床あらしあ森
ぬはめりの亡状さしむかれと指てみてのひすとて
射さひゆかりして稽古返事説つきまろ力もあけ

遠うこえ見もろしけれそめる讃聖隆子乃説
うらしけあく語らしあれはよし　若き世業ハいろおとこハ
いまた二文字をあなた元の宇をかてハいつたえとありくて
孝行中山殿の人ハ万人ゆかされのあちの氏二ことせ
前よそしめて僕に付しはら満りとそさけてまし
ぬとはいはハ四弟奥ハとくの勧文の旅れと参さし
わらぬかるゝよはあう江の浩りしく人をもかつの有道え
昭らく人をもろつてのへうらんかと逝懐ともまそし
さそゆぬともろくめつらしく對面思へつるものゝ家
世をあつくとあう草の旅ともゝ何ら道をとおこしら道をと

橘の逸勢朝臣の手ハいかにもしるしとかし額よハあさ
もちつんむとかしくさせのえくしくてやさしきかも
ありて彼の御京極の一乗院の寺ハありしめて
此ありしと云中ぬ往ちよう　借つくる文云日譲与
屋地并資財等事合五間四面寝殿一宇十三
間廊一宇三間一面侍屋一宇三間二面車宿一
宇七間三面雜舍一宇　五間二面倉一宇七間
一面倉一宇　三間一面倉一宇　湯釜四口
一口六斛納　一口五斛納
一口貳斛納　一口斛納　敷地伍攸
右件家地湯釜并自余内財等譲与歟位賀茂重保
處也敢不可有他妨於地者彼家母之私領也造件
屋等所付屬与也不可有他妨之状如件仁平二年
十月十二日　神主従四位上賀茂縣主某在判後
人のすまて重保神主と出之て是ハ園城寺本にや
いふ家説也　楊本服凌ちかいふなり　加茂祠官京國
小京師の子にて重保とハいふなり　卒去の年月日も
知らすといふ　あしそれハ今此林氏の祖にて
祇園女御の兄なりと称らへさまに今宮は若狭大路寺
ありと見ゆりさて西の時そわかるく家
九日あたらいとさむしかくて東福寺へゆく　仏見院

宸翰勅諡聖一国師六字并度牒の常楽庵の額
国師請来の孔雀壇五種展宗公拾経記宋高宗の
御書の碑太白名山碑天童山景徳禅寺碑東坡の宸奎
閣碑皆石に彫り補之の楊妃殿主の五百羅漢并幅
同筆本五十幅當寺無準寿山図無準筆の選佛場と
いふ額の外十四幅張思之の方丈といふ額の
数土額抔くさくの御筆なれと略しつ又聖一国
師の度牒あり永久元年十月廿日とありかれし當寺
あり二通りにて一通ハ年号の所ハ皇帝宮印と云ふ
朱文にて長さ三寸四分よこ二寸八分の印一顆捺て
あり一通ハことにまし連署なり紙も黄紙と然て
古きものにて文字もきえうせ焼絵ありて所々みえさす
諸堂の又あり　まて通て見る日もたけて人々けしも
なくさひしきさいもんのこなきまゝよみちれハをそ
ありさきかくりきてもいふをきして
當寺ハ三聖の寺也あるへき人あもむ　其の山寺
十日なるよしハ六ハ僧侶場にて一遍聖絵詞とて十二
巻あり其奥に正安元年己亥八月廿三日西方行人聖戒
記之并畫図法眼円伊外題三品経尹卿筆とあり
詞ハ并ニ聖戒の筆にや行房朝臣小細語り絵をなせり

すくなるもとみへたる様の蓋に應長元年乃記あり
北山太政大臣家より百首詠進し時様穏しるとて新詞
歩附のよしなり夜寂にて一篇上人の時の名筆にて
されはものゝへし夜まくらにて是のことくあらはる衣
なりけり箱なる物にあつかふ人行ゆく一篇上人筆にある人号
標具ハ造士卯金世々上條切といへるにやとおもふ
四條左縁入行あり女にて一篇上人絵詞共巻あり利
絵取者光行 詞は後伏見院後二條院花園院宸翰
併法補忠公同実兼公冷泉為秀卿筆といへる絵て
ありしくて入前もあり 開山浄阿上人僧一巻

古名まで奥子勅判まといふ由見せしかハ加仁よ母
あふれたるさまにて後京極流にて西へし両手にて人
おはしけれ絵詞三巻絵は筆者もさうさうあに詞は
岩を延准后筆翰なり 粉又会所にと見ゆる
十日其ハ其れ北風はけしくていとさむし 登頓上人行
されはまて縁起の絵のなかにもうつらしくえまれと
いとうけるは記そのうちにも両まきハ一休和尚の一枚
記語の跋ハ両手それなくゆえ侍る如く大字流へ行涯
醍醐天皇御作の筆ハ入林寺金 後陽成院宸翰并又大字流
三字一体筆一枚記語を添てなくぐく行事

十二日夜の月ふかりてくまなきはあらね也
いつもさえまさりし秋の猶やの記憶出てこれは寛政に書
冬ざれてさむさ甚しかりしに壇王法林寺の上人
光明寺の僧のうち誦ていた紺紙金泥の法経集
懺儀二巻ちらと入る行阿弥のめでたきは添えて
古ちよのあつかなるたとへかたし 箋は黒き
汚箋のこくうは大和めきてそれと表て
之しくみて緑とし箋とあるきらめきくの
多ちれあやしき角に蝶の金具ありさて紫木の
組をそのひて前の端に手鐵つけし綺草て手鐵

さいつちいみかんみた中真関山仏中上人自筆の
琉璃非凡紀方子東暉に托草子五冊為同恩芸紀
とそ延宝元年亀山院公山院通雅公と取て勅問
あり御筆を申受上人の自筆なりとて文殊中琉璃
ちの御国の付乃殿まゐるとて奥書十二篇に記ある
何ちみを挽くさりしを来の附くなり入りて度行
ちあまり行あさみさぬ山内院宝蔵の坊で清書とる
一帖七帖あり要不宛陵刘光易摹鐫と記さ
十三日夜ちろいとさむりかふきさのゆふそこみして
さもろ目録書つ

十四日雨ふる南禅寺へ行古文書多く見る夢想国師
草録幸私記一巻天下南禅寺記一巻虎関和尚筆
書籍癸巳春正月廿四日信上釋有諸謹記千本山
表率寮とあり 開山大明国師諱普門号無関像讃亀山院
御製後柏原院宸翰にてあり亀山院の御腰輿御
扉繖あり養翠寮なとにものさいの傘笠持かきて付
扉繖のことをしらぬさうしなるも聞くうれし
くあるといふ延慶内通武野宮紫宸の中小腰輿一具
扉繖二枚とみへ山槐記ニ鳳輿出西廊東仏殿ニ扉繖
覆此等の記録相具腰輿なとゝみゆるとよく心得られ
ぬ又天王寺へ行こゝにも古文書多くあり大寧の秘書
といふ也あり大寧の紀行あり又跋閣寺へ行古蹟多
とて七川入定のさうつきとて七堂此名かきこゑあり横川
和尚の書ある世にあるとはかりてすれてみへ侍り
見られてある神文のうちに楠木正成の紙本存録にのせ
毛也下のまきあるしふとて入門せしの日見部表ねらい
挙もて詳密なり地柳出家ハ数百年来御厨司前の額
個郷ともむかし光厳院の丹波国山国へ遷幸あり
し時御のつきにて小はなひ入ふすられ廃をゆし中小
此人祖のいろしく井もいて第一を日別の借御もと

こゝろよくしてえ文政五年ハあらしひおはしまし蔵
それ色下此道ハ寺也原実房宗のたくたふ之
ともつけ侍りしものゝ也 黄石起出ると云へる
大和の編集もまゐりたるひとの名ある所々
十五日床をかれすこしあそひかたへ寺へ参らんとて
出ぬ
十六日こゝよりふよあるくさよ鈍智院僧正の作るよ
立寄り神もあらんその日もかきて中へ入し浅草の西
たつね
十七日床を遅くいとのどかなり外の景を出立て

宇治へ行かんとて小より大仏の前を通りて深草の此
里いなりの山に詣ありてまた藤の森の梅谷桃山とて
いと広き園に桃いと多かりしか今は稀と来見
伸しそとほくよしといひて行
桃山と云ふ城にて昔秀吉公の住給ひし桃山是なりけり
伏見を過て豊後橋を出橋を渡進みて彼方そてける
道を此あたり広の所よここそ小地蔵寺ふかき黄檗
山ふもとに萬福寺にて鴻様橋の小渡りを見すそ
平等院の前なる菊屋といへる家にやすらひ此屋を出
つゝ共に庭に松一本ありてむかしいにし頼政が

あすこに比叡山をも見わたす通円寺居などまのあ
たりなりぬれど、こゝにて平城の都の遺跡の多
学なりけれし北面の門も設けたり葉末たにありし
扉の蓋鳳凰堂鉤鐶なども見えぬりし鳳凰堂大安寺
の此彩をて扉の絵を為業色紙形を堀河左府なり
入木の道をもいへ此彩扉の扉として左右の色紙形なれ
ぬさ色浄濃して絵をもわれなし彩りの文字を能生
のみそへうつし置て年代の久しさもうせなされを
字のさ数点乃することなどさみすらるもまゝのまゝを
うつをしけるとも見たる本とも所々通じて得はうつし得

山吹の咲けるを南に院御所山門中に塔の跡あり
ひとつ銅の六角の花瓶にありて檜の年に入宝暦六年
九月此地にて塔の跡より中より出したる
さるの銘なともありそれに納る金銅の方函
に銘文あり延文元年丙申十一月廿一日恭奉與菩
薩御願謹奉施金銅方函結縁於鳫塔之中宅生於
龍花之暁法華滅罪寺比丘尼道秀とあり與菩薩
とし銘のかやと同じ見て興正并の事と興并
と者思しまさるなやりして與の字をうまくたる
ものといへ書けうらより出たる鉢留金泥の跡もあ

刈與正弁の筆といへり又宇治橋孔碑の行書あり
忠文の社龍宮太郎ふしあるは悪心院へ行く伏見院
宸翰恵心僧都の法語一幅持明院基時卿筆恵心院
三字額あり又與聖寺ふいふる嵯峨親王御筆額ふて
興聖寺林禅寺とある額中院通村公の書なる事與の
祖道元禅師正筆の法語ふとありくるは人々て
ふし以東寺にあるとこそ

兼出ある〔ひ〕ひの枕さむる夜は川風もすさみて身にしみ
十八日朝雨ふりて辰の時よりはる平等院の名所ら
うつゝ殊更あくまき浅瀬ハ清く見せてみえしその

猶もあさやうあるハ中也あり　扉の文ハて川と見えり
通円か茶屋よ立よりての後ふとこて橋寺へ行碑
如守りうつし幅ミ尺ミ寸　長ミ尺伍寸　猶ミ
苔むしたる数紙もいふなれハかしるよ中にいふなれと
此礎石よ文字あるを見つけあり出つる其
みえし宇治橋の碑なりとて此地よふみ字ハ
四字ありく浅きまて二段ニ行あり三段の初一字つ
ミ毛ミ文ハ　浼浼横流　其疾如箭　修　世有釋子
名曰道登　出　即因微善　爰登大願　結　竿
古七字あり全文ハ帝王編年紀よみえたり

さも枝葉異説なれと道登を道照なりとせしは謬
りなり宇治橋を道登造れりといひ編年説にも
元興寺道登道照奉勅造とあるを異
紀に記されす続日本紀道照の伝に此橋を造りしと
あるによりて道登か事はさらに聞えされと元亨
釈書本朝高僧伝等の書ものにもいとしるし
然るに此文の引たるも打まかせて道登や
いへる名の正さやかに於て有るそこに功も有そ
此とめて見しさても続日本紀に奉勅とあるをし
此宇治橋もとき法師の作て橋造せしもいと

かしまに文此二人奉勅て造りしかハ日本紀
にも書るへく又碑文にもかゝせやは有まし
へき抑かゝしの勅造にて造れるにやあらん
又道照道登同人にやといふ人もあれと道登か
次句ハ出山尻恵満之家とみえされハ道照とハ全の
ことなる別人にそあるを道照の年をかそふるにこそ
此橋造りし大化二年にハつかに十七歳にて猶わかゝ
かしく道登か橋梁にて道照ハ力をあはせしもしるへきの
あらんか秘説の事なれハ世のさうしに載たる
十九日卯の半に出しをたちて京より宇治所を

行きかふりいてゝ吉も渡し里の明くる此左の
左右に菜園を見つゝあゆく
誰たぬとやさゝげ茄子も植並てみなさや宇治の羽束
はさかりまけや久世郡なり座摩新田といへるより
大和海道に出る左に久世の社あり村を久世の
里といふ長池の宿まで水村井といふ所過て
大井出山といふ宿ありゆきて宿を出れば
玉水の宿のつゝ過ぎに川あり是なん井手の玉河也と
いふ水の上ゝていとおほく流るゝにあたりを見まはし
たり

志賀のにる所の川かしても玉水井手の玉川
なりと山吹おほくありといふさゝと過ぎゆくに左に木津
川流る是は日本紀にみゆるいづみ川にてそのむかし
いづみ川ともいひ今は木津川といふなり此地を
行も左に大かもといふ村に山あり宿の村
流れのたゞる元をいひて西のわたりにおりてあつて
木津川は舟にて十ある宿なりみなれてさらにわたし
をうし西津の宿にて出でいひくはしく但ふることは行
又山城大和のさかひ山といとたかくきこゆる奈良坂
越の本ともいふ宿のあかりてなんいゝはてにとゞめたまへ

住之江文庫

飛田蔵書

こゝよりふもとに行の雪折まじりて行
町より入て般若寺の前を過て左に笠卒都婆
とて勧操僧正のいとなまれし所なり碑二つ
ありてハ梵字つき一ハ漢字にて偈をもうつせし
たかいかにもむかしにて此地のおもむきおもしろ
またる般若坂これハ北山十八間にてあなたの
ありつ月ありて西の方に九く割りたる石並べたる
ゆきての人のやすみて腰かけぬれハその裳に入て絶條
川のさまにさゝりて流る石橋ありて行る也また も
三條通角振町園村京之介墨書の額にかゝる

後文　續ふや海り

九日京おくらんとて東寺へ行七社の小倉うつせ
十日まだおきておかし　あさ霜頼寺をいでて讀の跡をうつ
由まては太秦廣隆寺のうちまで路ハ紅西の他のほし廣隆
寺縁起をみてたれど讀むとりて人まては他さの石八み入く
路頭の之小真言流續まめて誠方ハ御室守覚親王
芳躅をやいとまなく人への行衣を合く青楽ハ散
中よりかへりて持明院藤中納言殿ニ誠後はかへりて
来つきしより おのが家にかへれば明るとも約しかまし覚
行りて初ての見乗は出ら乗中ニあまたあらち
に記那曲阜様の濱勝まで高代の勝能のを在たて

ありけるよのこともなきへ人家おほつかなかりけり 郷曲
ハ形敵もなくひつまはしこゝろたのしみにて披攘をは
一さは心とゝめてきゝつゝ桃しさいもんのこゝなし
十日朝ゟ晴天ハ形くもなく卯の時より小出ヲ立
雄ハ門前に石の下乗あり 正安二年十月
日造之 権大僧都永瑜 敬白 小き所てあり
三絶路ハ法大師筆 自十如是日光山碑文
記業ヲ後白河院御寄附紺紙金泥の一切経
あり 保延帙箕に奇麗のけて妻に大般若経
に黄一帙とえりてあり一帙毎に十巻づゝなれと

廿日朝ハ空晴れ雨ふりけれともあやうからすて出立をとゝす
きのふの法隆寺村清てつかへ法るはかり也卯の方にあたりふ
立て法隆寺へ入り奈良の町をさしてゆく西に生駒山東
に春日山三笠山ハ東北に高円山なと見えてふもとにさき
山ハ村清からなと志て其中にて見えわかれけれは
き地西南よもむきハ右に招提寺ある西大寺の廃跡と
三條通にて行右に火屋に南都ありつさしてあり八幡宮ハ
始見つくしさる影揺てあり 彼山を通て年時ありし法隆
寺村に着ぬ 奈良ハ流上り八幡駒なり 幾十ちかく
して法隆寺へ入り 普門院 西南院 宝光院 西園院なと

出あふ南寺にあそへる布ともいかめしき画とすて世にも
多く草剣の備なりといふ修補くはへぬれは文字ひかれと
いつのよにかと見てたり三酒説に之なるて変画なれ
先七種の変相として筆を布せるまていなる七種え
釋迦如来の番者掃衣聖徳太子真筆紺紙金泥の梵
網經神代文字賀聖瓢太子御筆市中蘭御所古筆
あり梵洞經は真字なり神代の字は五大力明王の像あり
て天竺国の中にあり賀聖瓢は文殊菩薩のひさごといふ
孔丈子筆踏朝四皓鬼谷子蘇秦張儀の像ありといふ
絡あり御所筆蔵として軍畧者よみてしかるもけり

唐代琴 甲のうらに開元十二年歳在甲子五月五日
於瓏縣造と二行よみさしてあり金山寺香爐先ハ金の
大定十八年の記さらにみへなみ文字と方に出てむかしハ
多くまかりもらし人ももてきしてとも中かうか堂世にな
金山寺大殿弥勒前とあり弥の字方に双ひてあり
天平勝寶八歳聖武天皇御寄附蝶小獅子事なるあなり
映して詩ふる古印二つ一つハ法隆寺印一つハ鶴寺余印
そのほかも数多あり石箇鞠毂并を床還城楽面うつた
源信氏永仁四年七月七日と彫てあり又妹子請来の
添華相蓮葉のまき志ありいつれも随代の物とみへ侍り

廿一日雨ふりけれハ綱封蔵といへる文庫にて宝物拝見せ
光明皇后御筆とて数巻の勅封もしめあり勅封にて拝し
まゐらせぬハ光明皇后の遺墨抄にみえたるかことし法華の
勝鬘経之し　百済の河成か筆上宮太子の肖像ありこれそ
此屏中第一の画とみえたり河成ハ平氏の武者修行しける
人なり鶏鳴といふあり是ハ風俗なりしと画者まゐらする人ハ
いかなり絵巻の法華をかゝるに三つにひて消えせんとなさる
打出ぬる屏風をもしてけふ物のみ絵にた奉る殿まて八世寺
伴涼相応とこつる文人これを同代おもて遺物として傳房にまても
あるかし様此絵ハ三条院の延久元年よりはて光明院の

建武のころ法印法橋実円修補し又後円融院の康暦
二年賢覚法橋修復して後光院の延宝二年法印法橋俊
長清因幡守為再度の修補をなし天明六年にいたりて
その後又ハ新図をもうけて先々の屏風をもとのことくそ
二枚折の帖となし此修復をそへてこれハ古画の傍に
の筆をそへたるもみえたりしは如何さかさかし新図ハ
大坂法眼法眼円生又学んでの柳原家よりは黄丹
法衣服飾此下弟円山縄二面古硯味摩之清朱伎楽
面数多此外に古画なとかあり古鏡二面の内一面ハ
背に詩を鋳付一面ハ縁に五言の詩一首中にこれを

盡く続けたるその詩ハ獨有幽棲地山亭昝女蘿澗
清長低篠池開半巻荷野花朝暝落盤根歳月多
停杯無賞慰。峡鳥自徑過。又海邦にして潤りて造りし
緑の所にさるもあり重大廿六斤受一石四升と彫てあり
その外にも天平宝字入ありきとのえらびにく三貢三
下毋あり又長九寸七分除二寸なりの平布もあり大寺の僧
がそあるはなりの布に継めもされし中信の細緯越出て
裏ハ幅ひろき布にて綴に當隱國信太郎中家郷戸
主大伴羊く天平寳勝八年ここ書りて出その賣猶
ハ猪その古文くや八年の十八十月と如けりきてこえくハ

消てみえし廿布のあるものハ幅ひろく四尺あまりハ尺八寸あり
ここに大尺にて一尺九寸を凄日本紀ニ天平八年五月辛卯
諸國調布長二丈八尺濶一尺九寸庸布長一丈四尺濶一尺
九寸為端貢之常陸曝布上総望陁細貨安房細布及
出絁郷庸布依舊貢之とみえ職役令にも調皆随近
合成絹絁布両頭及絲綿嚢具注國郡里戸主姓名年
月日各以國印印之とみへたるに符合しけれはなりして
大尺の長さ今の尺にも曲尺にあたるまて古布の絹
えりぬかいよめてたけれと古きあまたあまえたる
あるもとのこへりこそなとこまれ文字にも書記そしく

欽明天皇　用明天皇　聖承てふ聖徳太子　間人皇女
膳妃芸子　雲聚勝万恵思　弘法日羅　蘇我娣子　調子丸
都て一幅に画きたりあり古めていとすくれたる世の絵
にやとミえいときよらなり聞経画ハ土佐の法橋隆房書
錦袋に入て閻魔関白殿下よりおくらし之中にいれハ古き緞の服紗
を巻錦袋の緒紐覚るに紗をかけしれたる黄に
法橋に叙せられ證空上人を嘱して導師として供養
遂ありしとそ粉刷かきつしともくにかきもそのあとに舎利
唐よりわたりし南無仏の舎利をおさめし塔あり又
あり妹子請来の法華経八巻一帖にて宝篋に入て庫にあり

てあり聞えし人といひて数一寸ほと造りおもあり歴人のさ筆
しるしもきよろしき図なりハあるにてきたて書人の
へきにあらすまさしく之ハあり之ハ太子よしたるものなり
太子製作の法華義疏四巻表紙にしてあり法華義疏
第一とある下に此是大委國上宮王私集非海彼本とみえたり
用明天皇宸翰法華經八巻あり御養子似て愛多く之か
て書すくいつくしやかにみへ傳へ貝葉梵文ありて御筆とは
へらあり紺紙にて造る金字細字ともなり名高き宝珠
もあまたあり菩提樹葉の紺紙金泥あるにそれハ舎利
縁起等とあり後に又紙形あまた一ともなる字をえて形あ

立秋ゝ七月八日ハ僧か曉といへるをえ有るはゝるも金堂にて
太子追福の本尊とて山城大兄王子いとなミ玉ひせのふとき本尊ハ
鞍造の鳥なるもの仏師の作にて後光のうらに銘文彫て
ありて銅像なるハ文字のうけあるもきえなけれとも年久しく
其後もえあさやかにえうつしおきヽ文曰法興元世
一年歳次辛巳十二月。鬼前太后崩。明年正月廿二日上宮法
皇枕病。弗悆千食。王后仍以勞疾。並着於床。時王后王子等
及與諸臣。深懐愁毒。共相發願。仰依三寶當造釋像尺寸
王身。蒙此願力。轉病延壽安住世間。若是定業以背世者
往登淨土昇妙果。二月廿一日癸酉。王后即世。翌日法皇登遐。
癸未年三月中如願敬造釋迦尊像并侠侍及莊嚴具竟
乘斯微福信道知識現在安隠。出生入死。随奉三主。紹
隆三寶。遂共彼岸普遍六道法界含識。得脱苦縁。同趣菩
提。使司馬鞍首止利佛師造とありけ記ハ推古天皇の卅一年
乃文なり 法興元世一年ハ推古天皇の廿九年にあたれは聖徳
太子の薨去ましませし年也はかりかされしハ蔵にありしを壒嚢抄に
此釈迦三尊の事をかゝれて法隆寺の長の語るハいはれある
ことにめでたきことかりける しかも中元庚申とある所を誤りて
中元ハ光武の年号なれとも庚申なし 庚申ハ明帝の永平
三年なり 又古博ニ大興二年ともあるハさらに考へきよすかなし

徐氏等様なくみえたりたくひなり鬼前太后ハ太子の母穴穂
部間人皇女なり法皇とハ太子をさしたまへり王后とハ太子妃膳氏
なり推古紀にハ廿九年春二月己丑朔癸巳太子薨平氏伝にハ春
二月太子と妃と同日に薨し給しよし見え年もあひ月も

太子薨逝ノ年月光背ノ記ハ推古天皇三十年二月廿二日ナリ書紀ニ所見ハ廿九年二月五日ナリ

あひたり鞍首止利ハ推古紀に鞍作鳥と記され十三年夏四月爲
造佛之工とみえたり又このころにハ薬師の像ありそれハ年
も先なりたり光も光背に記文あり池邊大宮治天下天皇。
大御身労賜時歳次丙午年。召於大王天皇与太子而誓願賜我
大御病太平欲坐。故将造寺。薬師像作仕奉。詔。當時崩賜。造
不堪者小治田大宮治天下大王天皇及東宮聖王大命受賜。而
歳次丁卯年仕奉。これハ推古天皇十五年丁卯の歳乃文
なり池邊大宮治天下天皇とハ用明天皇の御号小治田
大宮治天下とハ推古天皇乃御事なり東宮ハ聖徳太子の御事
すべて此堂内にある佛像ハいづれもめづらしく
貴くして世の常ならぬ物也此の記文ハ旧記に出たるハ
古林抄と申して書のあるにもこれとも記されたるハ世に
見えたるもあるにや此度の開帳にも拝見せしめ給ハるに
となりし四天王ハ百済作と云後光のうしろに山口大口費上
而次木閑二人作也又一躰にハ薬師徳保上而鐵師手古二
人作也とありこれ又文字彫てあり文字詳にハ難読の所も

説法涅槃荼毘の四相を三国の土にて毎仏師造りしといふ
いづれも凡手にあらずみな作り方手際至て手を尽して流ま
人像にても世にあるとみえて威儀法も流石につよく勝
なり本願は推古天皇庚寅の歳なりといへりて洋
姫君といふの女子に於て有なりけり漢の文字は詠じ
なし何といふることをもて見し中なんといへる秘中今寺蔵
妙法蓮華経を見しよし古記にみへ侍るとぞ
廿二日原をいで三条通りて勝尾寺へまゐりしより 西国院の
霊場にて弘法大師筆一切経蔵の額あり古きものにて
あれ物なり

廿三日まだくらき卯の刻にいでたちて信貴山へ行 法隆寺南
大門の前より並松村を過て龍田村龍田新宮龍田川
橋をわたりて唐土神南備田川 本山寺といふ西村といふ村を経
野村南畑村西名といふ信貴山の道より信貴山へは五十
丁余ある村道の高山にて登りし朝護孫子寺は本尊は毘沙門
天にて聖徳太子の開基なりけるよし霊宝も多く毘沙門
今は寺にのこれる宝物どもとて小松の宝を始めとし毘沙門
とよりいへる宝物は信貴山縁起絵三巻あり是は絵師
僧正の筆といへるは古くみな作り詞も行成卿と
云ふ時代ものにて誠にあはれなるものの数々ありしは保有

胡籙の残なり一巻ハ古縁起の筆と云ことハつかへてけ
らし筆者ハ大僧正貞山信なとして名高ありいつまても後柳村
筆の筆ふ比し根ハ一寸ありそ十七本きらる竹にて作りとりて
大僧正ハ新田作也壹尺肆寸捌分有りて其のまゝわき漆す陸
分能帯も金具ふ銀まて風凰の蒔絵ある小倉ハ彫りある
作也あり人名守肆分うてそのまゝわき陸寸捌分帯ハ銅りまて
え鹿金具ふり笈ふそこそ所あり漆まてつくりありひて
ある鼓筒腰筒振鼓胡蝶迦陵頻の花あり楽の面の鶴
本まて土ふあるとありいつまてもいと古きよみへ侍り又摘心
威男日大神太刀旗鐵の鞍なとあり当の宝ハ後まて

うたかひしかハ千とせを立し後世とてあらんうけしりしもの也
ほとりて立野村に出かゝる龍田本宮あり　社僧東一坊ハ法
隆寺の西園院兼帯のよしなり出る所一位龍田大明神
とある額ハ野村のよしとそうけたまはりけり村にとまりて神
南の杜ありすこしゆきてもりの口に龍田山としらめすしるし
ちかく亀龍田河ハそのかはしにありけるよしをしけと見る
まことに古き名所なともしらぬさし龍田河のことハ万葉より大和
わたりの花ふかきくさとて松原大和川ハ西そわたりけれ
よりあかしいは廣瀬郡なり並井村より山を廣井山とゐふ
立野村をさて達磨寺よりこれなんと片岡山のいゝうえ

てと海をのひし所ともを多深く人のあはれなりし離れけるさ
思へきひしたへうし
ここもとへは野しあれて常ならぬ行基山のあたり中ふるき
堂の後に文安年中に立し碑ありさるを出てて南南に
二上山葛城山東に行基の墳塚ありけしあたりの地の東なる
庵しるのうちにありとの池といふ所ありさかれなあさの原
三つ名ぬかや一辺をえきとてのかた人あまてあるこ見し
てあけは知道ぬえのりあれとけれ知道ハ出くつき中まあ
くてとこれ上星村高村南村杭井村良福寺村今池村
とりて此の下に高麻寺のつあるに中とる

廿四日左ところ古はより清見をこせらるあて二上山麻呂古
山の麓なるをいにしへは高麻寺の恋ぬをえたる今の寺号
ハ新寺号也とて天保二年清水良賀法眼原実文の勅にて
あらたに寺号ハ前陵の勅をうけて出道なるよし厨司
の扉のうちにはことを初名度上人鎌倉右幕下大将の厄
ひきて彼の男女の名記しあり古書業往ハそのうちにひめ宣
てらうちに御海そ稱にて海とてき厨司の板に
法てありしを建保五年中東勅大名院の性忍といふ僧の
あらひまて別に全図をうつしとよ尊の寄現在の清妙
多うらけへうつし浪から池よのこうけれさえそうちもとし　巻

久しき事ふそ云人ありとて様ふ説ハ四條流の仁和寺中
のこれ給ふ伺縁統二世法親王の光厳院ハ逍遥院内府
乃此より後京極流實躬とそ上よふ此の親王よ西室公
順僧正ぶと記て九人の筆や享禄辛卯内府の奥書あり
當麿寺にあり叙ハ後京極流實躬なり世尊寺流から進元
波つり法然上人のり此を言ふ画ハ古倭寂細ハ賛見院後伏見院
後二條院三帝の宸翰にて後二條院ハ清盛平世尊寺定成
卿下る歌ハ是て尊円親王等輔也世尊寺家輔とる
ハ遣とらつし也よ字さそも後伏見院叡山の尊円法師に
仰て付倒とつらせ給ふ一める道生を法せるらん

しハ智恩院のそそ給ふ又別よ一部ふるさしよ所秘藏あり
しきに後よ尊円ハ智恩院住持の時よ御ハるゐ筆 尊円ハ
第九世也第十一世誓阿上人の時円光大師絵をと付給よう
さしおろう付紙とも誓阿ふしよ柳鳥流よ十梯の奥書と
てあるて秘蔵とる云ありしたるよ十梯を以て伝法縁円光大師絵
自筆の選択集おき花大師先育円関附合ふ利仏舎利
松殿の殿月輪殿の一自笠給仮名又十界の屏風とて
紅葉き葉ある絵ハ恵心僧都色紙ハ伏見院宸翰
とのへしいとうしふらりしさ拘かなり
廿五日慶元る為武業ふ於ん尽て卯の五つ比よちてい大樹

村中村吉尾村西戸村古備村大中村下高田村一向宗の寺あり
葛城川ハこゝにてはいるなり、それより高市郡之曲川村
一向宗御坊あり。蘇我村くさか川橋あり。それより小綱村
今井村よりき町なり。それより川堤ゆきて又それより川の下
流なり。此所より東ニ行ハ山あひハかふしニ原本なり。此
ところ行バ山寺ハおほ山といふあり、そこの畑の中ニ
塚あり。松一本たてり。これをきりきしき神武天皇の陵
となん心のちらふしおそくつもり彦輪めし　続詩

神武陵

山陵繞閭里人来。半死孤松一畝丘。不有聖神開帝道。誰教
品庶脱夷源。蔵王像豈専金闕。藤相墳塋重玉樓。百代本支
麗不億。此處何無培一抔。

あるひハ橿原村ニも又ん此辺の都の跡ありといふ
神代の古きよりうつりき金剛山よりして山々あまたよみえる此の塚
いにしへよりつゞきたる高取城川まで三輪山も高田四條
此所より出でハ西のねびの東南の葛下ニ久米寺高取房村
あすか川をこえてひらた村小房村縄手村神武村畝傍村
膳夫山をこゑて田中村古さき宮南村たち雷村あめの香具
小をさへさのいさそれよりさしきまて同あきし見よ人あり
河原村先ハんの跡も河原寺のあたりへきいとよりおつる

楊村楊谷寺本尊ハ十一面にてかゝるつふ日本の佛なり清水を
作り出すといふ弘法大師の旧跡なりし碑文あまたありき
奇なりすこハ楊の湧水出るもの其門を出て岡村へ入る
中ありなん岡本の跡の旧地中きさの寺も堂あるよしや
弘法大師の錫杖善峯寺といふ寺々の字まで移りける孝謙天皇の
尼僧文殊像の本尊といふ寺までいひきかりし岡村へかゝりて
善峯村より川も入る此寺道をまつり但馬市といふ
社よりて上そのあれ延喜式に見ゆる乙訓社なり社ある
へし寺へ入り西の元をそのゝことならの出るなかさ岡村まへくる
堺なし帳奥寺の事元の跡なりし田畑村寺を立ぬのこといひたる

芳徳の石ハ旧跡地として松谷といふ所あり竹のそ堂の旧き
九ヶや川原のことわりも村ある地といふ先より東よ入りハ後の左
村右の畑中に石塔をつくりあり土人ハいふやとふ古き墓穴の
あとけなるよし土居村より淨心寺の旧の旧跡なりとて細川村
谷川寺をそ流され山のさる東の方谷に寄りとちくつりて
えもいはれぬ眺望寺村乞この杜大路とめの杜をもいふなり
大原野へ坂道にて坂をいとこし西寺村といふより南をこれいひと
きりさしめちかきの坂へ行る所へ人数たくへ家を所見とて三竹野と
いふより新塔ハ寺よりのもとの本へ名ありし人かつての所元るといふ
まち残る道なりといふ西善峰寺西門より今は勝持寺へ行く道

手も海との名ハ常住院にて青蓮院尊法親王より出来ぬ
京ふ成りそめたりとぞいふ
もとより古今集のむかし書の山坂を鶯籠よのかつまて世くハ詳にて
廿六日大和より南ふりけるハ世をあふ先御社に詣大和ハいつくも古跡
神ふりて羽曳野を史にて見えし人なるにひとに廟所の荘厳いふへき
ならし寺に法橋年とめて世の中くちやうといふもの也 狩野殿にはべる
能延親王のかきを始めて三十六人家合のきまゝ 繪も古法眼にて
光信なるも口をそらさる 春日神社の事をもの書し 菅原の稲
出雲紀繪詞の巻をりたるハ上下二巻なるに と光緑の浜に浦
の所よりうかかりたるにより繪土佐光信詞一条禅閣兼良公ハ壬當

壹巻なる也又後水尾院の勅根にて新たに書しより二巻ト
絵ハ古み妻父具慶父詞ハ二條光平公を御つとめて町の公卿の筆
二人乃筆なり 櫻町院御製十五首御懐紙武者小路親王の御對
添てあり 蛇頭ふれ清花流ハ是一帖にて人の筆とみえる
九條殿（師輔公）古径の大鏡承鴨櫻図并経秘密陀羅尼呪
一帖奥に此経一巻臣師輔手自書写以奉納多武峯衍規當二世天徳二
戊午三月十八日とありいふし三百年やせに於て東叡の大律中村
添の書にもらのかの拝領へしと云法眼せらるゝハ此経中ハ紙はし
記文そへてあり 安恵和尚請来の九條二筆等是ハ絵画をもの内
の伽藍ありし堂舎もれ瑞の霧盤寺ハ多くおちて霧盤のさぞ

[illegible]なり　記文曰此粟原寺者。仲臣朝臣大嶋。惶惶誓願。奉
為大倭國浄美原宮治天下天皇時。日並御宇東宮。敬造伽藍之。
尓故比賣朝臣額田。以甲午年始。至於和銅八年。合廿二年中敬
造伽藍。而作金堂。仍造釋迦丈六尊像。和銅八年四月。敬以進上於
三重寶塔七科鑪盤矣。仰願。藉此功徳。皇太子神霊。速證无上菩
提焉。願七世先霊。共登彼岸。願大嶋大夫必得佛果。願及含識倶
成正覺也の記文をこれは淨御大海の天武天皇の子草壁王の奉
為に建立せしなり和銅八年は皇子薨し給ひてより廿七年なり
あまた此記文の初に寺壹院四至限東竹原谷。東岑。限南大岑。
限樫村谷西岑　限北忍坂川とえりて　あらぬ事の様もつきすて過

村の名のみ残りても寺の名は[illegible]とて
ありしを[illegible]見出て世に[illegible]
又此の諸古き碑などをもとめて[illegible]
[illegible]
[illegible]しつれどもさつかなし　首書霊院[illegible]
[illegible]
[illegible]の碑[illegible]
[illegible]の碑[illegible]
[illegible]
[illegible]那山新記[illegible]の[illegible]

慶長のころ増果が屏風の時又兵衛武者をうつさせたりとぞ
久しく書きつたへて今清らの西都にて書画をあつめ
来て凡そ紙をもて我家の東にて表装しつゝ家のまゝ
似て傳へたる内裏御の時代々のまゝに柳大臧羅の小像は壺盛
あらまし姫を司きて箱より中にあつかふきはの又小野篁の筆
といへり書像の文字ともに去る室町けむし板刻さへかくし
てそ猶寺の額ともあまた寄進せられしもいまもうつしあらまほしくそ
当寺ふるに社のかたはらにあんら樹といふ天竺の木種である葉は[illegible]
末はよしん小紙のうら果をもちきんのしるしといふさゝめの切紙
ありこ竺のりの茎人文字をもさらさらにかきしるし清水寺竹なとれ
續葉類のさゝそ菴羅果といふ南蛮の住のものとも
してあめ濁よみやとことに切紙をわけてう文術我東西名
小色々みるうけあらや行ふる返しかなしかれ

倣詩

塔峰廟

明辟思舟楫。大家出棟梁。應機儘大懿。定令翊乾綱。
婚好桃夭契。賞延藤蔓長。策勲登大鼎。奉祀秘
神闥。寳塔層雲外。玉床怪石傍。樽分太官酒。爐
送御前香。像裂時添血。墳鳴或戒祥。忠魂今未死。
威靈護百王。

廿七日よべより雨ふるさのふに出立しよそ雲なきに目西の
縁古き大職冠の新重廟僧正第六世の唱復するゝ来
てをつかるてふ小門につゞて己のをしやうに立てゝつを之彩さめ
たゞ高山の東に百市村八十市村あり　やゝ高いう
ち村高羽村下居村倉橋村これより用明天皇山陵天皇
彩の跡ありといふ下村つゞき備前此あたりの石あり居あり桜井村
これより式一郎あり粟殿村金屋村石とび村あり日本紀
にみえし大職冠の御所といふ大和あたりの地にかゝるとおもひきて武
こゝよりそこなる三輪村別に三輪山にしたがふ地右にそひて川流る
三輪のさとのわたりをばとほりけとなきかゝの西にありしか

鶯竜よのりつされにあて何にかく来るも立しくわけしさいもん
のいるをし芝更村服部村三宅村出雲村とよびて初瀬の
入所より大名居といふ廣さ五町ばかりにてて五字宮の跡ある
あるといふのかし中の湾に帯につきて丈より出立て此池
へりあ曲明月輪池あとに出あれ葦屋より庚雨にも一えんえん
菱縄大和国古跡の御説書第一の夜あるほどし又古き貴山
通説にみえしやうなる法洞縁起詞は後円融院宸筆乃
よしこゝと法八幡もさることにて浴きけり居ある唐徽宗
の寄附れよしいつる荒蔵虎葦風かありまとをてとこれ
霊語説にも每に織るゝよめしてれしよまなくいとうけらし

古俗雑記といふ物に弘法大師の要出あり本朝九品といふ中に
けてあり大字居此家の古説あり此しも東寺ある人のいふとある
うつし得て居ることありし弘法大師筆の事よしきつれば
みてくれハ安斉道家僧といひ裏書させられてかの人氏瑞蔵
の能書に被せし遷禅は弘法大師の飛白十如是とかつせし
あり之實々遷敬の記文あり法師沈禅世姓菱苅氏肥後
國求麻郡人幼離塵受戒習瑜伽宗年及進具負笈入洛寓智
積之僧房而從講論之席磨義学之鋒者十有餘年業
成帰本國太守接待優渥郷里以榮之然禅以為累潜
逃出國境自號悔焉一鉢一錫行李蕭然名山霊區無不徧

歴禅自少小精思悉曇之學尤善梵書毎聞有前人之奇
跡必足累繭往觀之既究其玄之秘妙終自成一家凡
書梵字多用木筆木筆之製以木作之或以毛造之皆名
木筆禅之揮木筆之妙常人所不能及焉其使遂達
天聴去丙午之秋 法皇勅禅臨摹高雄山木筆之十
如是其十如是者傳云弘法大師之手澤也禅登山而沈鑒
者両三日即揮襟臨倣而寫得二本並飛白之勢點畫之
奇蟲鳥人物宛如與元本無異矣禅謂其本也凡手不可
勉強而成者廼擇其佳者以奉獻之 法皇歎曰臨本往々
有似逼媚於元本幸蒙 聖賞如此也其一本留而藏諸

吾寺、故記其始終以貽将来云、旹寛文第九歳次己
酉孟冬日 權僧正積教院傳法沙門運敞謹書、爰の野ぶん
あとありて宿まつかね庭の風のさそふもちとてなやめる葉
何それと思ひを秋かけてふりぬ
廿八日府中を立て長谷寺へ詣で一夜を明して独
閻魔といふにいたる是より十五丁まかりて幡生の三瓶安
置さしたる所あり冠旗のしるしたてといふ所ありとて唐り
華ありてうつくしき一切経の数は法あり西園院なとありし法
大師のうへのかしこのあるへしそのかうへの書を紙にもかねこたへさせ
ましありかへも其ほうきまてうかゝも何も見へずなる

ここは劔といふ者ありといふ桜門をいてたる石の手あり
ひとつ上野国保渡田よりあり石檀おかし似作り笠一丈
餘横五尺厚さ二尺五寸あり何の為ともしらず然し
むかし四いれもて己時ならんに越してきりと入しけるを出て
三輪山さしてゆくほともいふへくのそのきとよくみる
はし口より十町ばかりの石も石もよつ庵さあるをわたりて
也ありしともむかしとみえて代にはと揩馬之さのむかし
り三輪よりも百葉集にのせる京極黄門の跡とも書
ひとつのまさあかるもしき殿より三輪山よりて
大平ありてのちに社の像ありて御の三のそて代々のしる法

大師の像大師ハ忠如釈王の作なりといへと大師の作りてあれハ
東ことに坐し浄慶上人のつくりしといへりさ西之東社あり是ハ
三ヶ宮神をまつるハ社家川田元栄内し家殿のわ南に
岩の下にうつしあやしき乙女泣しりて神社家祢宜さけは
此ち数をとこれハ羊状ありし毛ハ事ふといふを世をく六尺もの黒いふと
ねえ小社の前とりろにかて此かかも屋宗もみ八尺ししもも
のなりをまつりし事之かはあさ海されと御前ぎあと捧大人
うつあるもみて日毎に神供もされそ縄かよしいふうふ
ころよ比海よりて京都一統をていう年十ふと四ツの篭次よ
御の家隣越し大僧官の弟母衣とりてこのかへさに為も

あしいとあるつかれハものなりと水神よ大神社氷船也應ぶ
廿一年と云ってあり大師帰さるといへる本堂の東の方ハ大
田の根子命のをおくもし御宝の跡とこハ椎数あり
様なりと神をいひて云まとと今の半はいまうにいハ海ても
あるぬるつし為朝逃君すハ密仁て皇代清宮三條の孫
の道いをしひし女子男をうめり。こまれ時あるいうしさる氏すこ文
定し清ハ義徳よ為朝をとりせんとそ都種よ皇の後とのに
あふその後ともあつる也と太平録探集持とりて云々ぞり
京西もあまともすられるるみ申して福町鳥湯村
千葉村芝村箱中村さいふ箱根ありて土俗も箱根坂という人

先なる人家郷は高市縣遊ぶ日向宮姫命の御墓なり在まよ
岩内といふあり又御陵村宜寸川の北に居立てある辻村郷
高村町の大つまにて古の南の寺とて其辺の辻堂あり土人かくあや
といふ所ぞ此谷を左へ入て古は別当寺ありて今は三十余年前廃れたり
の塚なりとて谷の墓所は南なる多武峰の蘇我入鹿の首塚とて遠忌の
御文なりける雄略天皇の御陵なりとて陵は蘇我氏の墓なりの塔
のそれ何れとあらねども万葉集によめる此所の辺にて宿りける
ひらけゆきしは世々の世の事なるべしとて書のせつけたるも
にその名も今はひとつのみの切よりさきの人のしるせるをとも
みな世にいふ名の古き事にいふもあやしきある者の古事をしるせり
てすべてけはしき道をいくつも越の先は万葉集にいへるひとつ
いもせの山のすべてよめる歌あり　其まじくりとその名をさなく
多くれと伊勢の国の寮よりいにしへのみを世にあつめたる
まなりける日こそはけはしきよりける道をゆくゆく山道を
なりて中山村成就寺村大原村石原村神社あり御陵の傍保庄村
のあたりの山陵のあたりにをせしを古道をそれとさへあひてさきよし
蕎麦の麓なる村といふ所なり丹波市より中なる伊勢の国へと
ぬけて入る道市よりや今の桜井市といふ所より往来の者ある
ほどのひろきさへ古き歌のみならず桜市の
ものせるもとの宿り給はんとその世にも道なるを人もそれ迄に

廿九日　雨こそふりてあつかり卯の刻ばかりに出て一里ばかりの中くらゐ
はる川あり布留川ともいふ石の上ふるの橋なり社のまへにて行く
まことにあらたにしきなる神なり神庫に宝剣其の
白木の箱あり鍵をはなちて開くことなしといふなかにもふしぎなる
ことやらはすれともあらはさずとかやいとたふとき所なり
ともありと云ふつきに行てよき所をせんとてさきにゆきたる道は海石の
村石上より東は京あり三輪山の此峯を遠く見わたして志るし
まことにいとめでたき古跡をそ行きて出れより瀬上に取る所なり櫟本
村櫟本村　帯解村乾の大門村町より十丁ばかりに帯解地蔵といふ
所ありそれよりひかれてはいちの町ともいふ帯解とはひとつ家に永井村
小永井村　貝塚村竹篭羽京の入口にていひかふ京
町より東の青木・永蔵京よりよき里あり又一の中にいる家
されば二條の大番にてありしかとさつ見えてそのほかに高輪あり
の東なる中道にいらでとかくつくりなり
十二日　雨少しよりよりめして西大寺の道はあるくてさむけさ心人
ひとしくふりて東大寺より平城の家のよりさきはなる通れ
そいふ所なり大平猪亥の悪男押勝のかたのなき孝謙天皇
の勅といふは神もその時まで御霊のこころにつけあり紀
のつかへて今もあさやかなり聖武天皇宸翰の勅書あり
御神前にいささかも家のすむ家の書記にて是天平聖武天皇宸筆

和尚出家せし天下無双せし 和尚宸筆をもて 宸筆を入
しよ御文書わり目の 板より弘まりし たり今網
の縁文とそのよ寺の本僧ハ鐵簡とし後にあれと鋼巻なとうそ
よふつれたる文曰菩薩戒弟子皇帝沙弥勝満稽首十方
三世諸佛法僧去天平十三年歳次辛巳春二月十四日朕發願
稱廣為蒼生遍求景福天下諸国各合敬造金光明四天王護
国之僧寺并寫金光明最勝王經十部住僧廿人施封五十
戸水田十町又於其寺造七重塔一區別寫金字金光明最勝王
経一部安置塔中又造法華滅罪之尼寺并寫妙法蓮華経
十部住尼十人水田十町欲々興聖法之盛与天地而永流擁護之
恩被幽明而恒滿天地神祇共相和順恒将福慶永護国家開
闢已降先帝尊霊長幸珠林同遊寶刹又願太上天皇太皇
后藤原氏皇太子已下親王及大臣等同資此福俱到彼岸藤原
氏先後太政大臣及皇后先妣従一位橘氏大夫人之霊識恒奉
先帝而陪遊浄土長顧後代而常衛聖朝乃至自古已来至
於今日身為大臣竭忠奉国者及見在子孫俱因此福各継前
範堅守君臣之礼長紹父祖之廣給群生通該庶品同辞愛
網共出塵籠者今以天平勝寶五年正月十五日荘嚴已畢仍置
塔中伏願前日之志悉皆成就若有後代聖主賢卿兼成此願乾
坤致福愚君拙臣改替此願神明剋訓以上表にあり裏には施封

五千戸水田一万町以前捧上件物遠限日月窮未来際敬納彼三
寳分依此發願太上天皇沙弥勝満諸佛擁護法藥薫質万病
消除壽命延長一切所願皆使滿足令法久住抜濟群生天下太
地人民快樂法界有情共成佛道以代代国王為我寺檀越若我寺
興複天下興複若我寺衰弊天下衰弊復擔其後代有不道之
主邪賊之臣若犯若破障而不行者是人必得破辱十方三世諸
佛菩薩一切賢聖之罰終當墮大地獄無數劫中永無出離
十方一切諸天梵天護塔大善神王及普天率土有勢威力
天神地祇七廟尊靈并佐命立功大臣將軍靈共起大
禍永滅子孫若不天平勝寳元年平城宮御宇太上天皇

法名勝満とあり　當寺四至の文曰東大寺畐奉　勅依此畐
定山堺四至北一堺箐八八上高峯二堺梅本横峯三堺嶋
八北横峯乎梅谷東四堺馬勝又外政所東峯五堺内合
井津谷南六堺仙房并御笠山口七堺寺薗西八堺興福寺
乾角九堺野馬道并冨羽北坂合右畐堺　勅定如件天平
勝寳八歳六月九日大僧都良弁○少辨從五位下小野朝臣
田守治部大輔王五位下　王造寺司長官五五位下佐伯宿祢
大倭國介従五位下播美朝臣として紙のつぎめごとに良弁
の草名あり此の願のそ草名はさだかにしるしの中にあるいと古きもの
宸翰の勅文曰　勅旨封佐竹戸石奉入造東大寺料其造寺

事了之後壹仟戸着用修理破壊料肆仟戸着用供養十
方三寶料永年莫動以為福田伏願以此之善之財寶因
施无相之如来普度无邊之有情欲證无餘之極果天平
勝寶元年平城宮御宇太上天皇法名勝満藤原皇太后
法名今帝法名隆基 字様たかひてらいらく（磊落）なり勅封の三
倉ハ国よりハ正倉院といふ也高さ十七間あり文庫ニ戸口三
あり床の下ハ廣くてあるけれともさらにぬけあくへくもあらし
是ハ南やもく開く事ハ少しまれ勅使松原にて天平勝寶の頃より今も
寶物も数千年朽損なく古き調度なとも同しくありとなんちい
さき文庫ありその中に聖武帝宸翰金光明四天王護國之
寺といふ額あり竪五尺八寸横三尺八寸なりこれを四行幽秀よ
弘法大師筆と云ひしハ誤也 額ハ四王及力士
の像を大師の彫なりといふをほとけの爾像なりし事とあらはせし
備れりけれとこれもそのかみ国府門にて今の天王寺坂の南にありし東西六間
南北十六間有由て名を西大門といふ今々額ありその門天正
十一年三月廿九日大風にて破損してかの額をさへにおさめし也
又その門を称れ額をもありし且其集ふ所井戸坂道東大寺
寺額字則弘法大師所書背面嶋井中奮撃寺明般
字至今凡痕尚存とみへたりされともこれも其坂を玉造坂と
いへりなりこれも弘法大師といふハ誤なる事勅額小野太師と

こゝにもこれは後京極殿の御筆を摺抄平經天造りあり平泓
りハ東大寺東寺渡部淨土堂逆縁鉦鼓五之内建久九年
二月二日大和国南無阿弥陀佛と文ありて天造れりかハ奉施
入東大寺念佛所元治三年歳次戊申九月二日己卯時平勸進上人南無
阿弥陀佛と文ありてありし重要備忘作業五柳子の如意法流
あり京洛の道具なるよしいへり東大寺要録十巻本紀事縁
起事付長事法流事付社法會事付祖師法家事別当事付寺上
封庄事末寺事雑事事凡十巻長承三年八月十日東大寺
沙門観厳集とあり法要録九巻本記ハ詳良弁僧正法
佛大功德沢門不私拾遺硯のこときもの風字様のことくにて佩に肩の

ことさりのありし称言金銅の唐鞍竹籠漆皆優美なるにて
いて古き代の物のさまくつたへたれるにてそなかの鴨毛屏風に
畫あり絵ありていつれも紙に書きにして鴨の毛を粘たる年ありて
なかにも世に要なきのこととかりて世にもつたはりて名もせず祥鼓田良嗣
以獨殺ホ乃句とかけるハ元禄のころ四屏封の附四海波をしるして
文字は付すとこもらふかすかにある緩かるかもしそ箋翰よりもつて見るものに
せしもの物に鴨毛あるはそなた宝蔵会すことに之とも見てそれの
すなはちなるてありけるにて此屏風畫大和めにてもかきてなりし
人ものかゝりしも四いかに畫をかけたる文字あるとふかく見ないそや
まもここてそれハ天平勝寳三年十月とありさふはすなりしそ謂せふ

れしおかるゝ舞楽の面伎楽の面もいとおかしかり　其の面に
に康平肆季歳次辛丑参月拾肆日前別當法印大和尚位權大僧都
覺源殊抽清淨之誠施入東大之寺仙臺久翫不出仁祠雅曲
追奏將刷佛會矣永曆二年三月修理之とかきたるもみへし
二日天氣よき日なれはけふも東大寺にまうてこゝかしこにたつぬるに
法華寺ハ城の外にて都のあとなる野中にあるを尋ねて訪
ぬ此寺もむかしハ大伽藍なりしか今ハ荒廢して其のあとの形のみ残れる
一かたよりて撿校の堂のうちにハ阿弥陀三尊のうつくしき佛ある
三日さらに朝より大佛殿にまうて再興さるゝの事にてあまたつゝ道
若草の麓にハ佛像須彌山等の形をきさめる所をも見侍る
人もゆかしかりこれハ草剣の形のおもかけにてその古文には
須の原に詣つきてはさらにいとかうあかしかく奉鑄佐蓮華八
葉高野山万勝院全秀奉行遍照院なといふ人々の手に彫てあり
さてこの佛像の奉安九佐なとあらたにつくりなせるにハあらすとて宋人
の世の人の手にかゝれるなりとし其古き八角の燈籠ハ宋國の
仏師陳和卿か大国よりて作りしとハ又て後家方か宋國より
渡せしものにハ承暦さるかたねのを前に佐比の母獅子
赤を譲つけ棹よりハ施繞切流蓮花葉浪園の交波流の文を
さる字畫清婉にていとめてたし今あまた程のあるを思ひに肩摩
太守の記文板によりて板にかけてあり　日南都東大寺大佛

寶殿者天平勝寶四年聖武天皇勅願成就之伽藍也爾後
四百三十二年高倉院治承四年十二月二十八日爲平重衡所焚
安徳天皇養和元年醍醐俊乗坊重源始發大勸進之願
至後鳥羽院文治三年四月後白河法皇命鎌倉右幕下源頼
朝卿再造之仍令重源掌其事建久六年其功全就三月十二日至
上行幸頼朝参詣先之二月上洛以〇慶之自是而又三百七十三年正親町
院永禄十年十月十日再罹松永久秀之兵焚爾来百四十餘年貞
享之初東大寺龍松院上人公慶奉
勅許　台命以張勸進之勢遂終修復之功實寶永五年六
月二十六日也明年三月有供養之儀今之上人公盛修之云士早貴
辱右幕下之後裔領薩隅日之三州祖先之志不可不繼子孫之
福不可不祈追遠計久思而弗措於是命近新構曼荼羅壇
一基製什器一部別鏤舎利塔以納殿内以表心裏上則助祖先之冥
業下則期子孫之永福云寶永六年三月十四日鎌倉右幕下二十二
代苗裔薩隅日三州主兼領琉球國従四位下行左近衛權少將
兼薩摩守源朝臣吉貴識
とありよき真ふくせり達
とこ〳〵さうやかなる文字をかへて入をとほとをうつしけら
時也そよく見えましきさうよハあの大仏の前でて見られハきこゑ
りうく二月生まれ肥前よまき水之清花生とも二月生て
以文彩よ保延元年八月廿三日千日滿但結願九月十二日畢文

ゝ於ゝ始自長兼元年十一月廿八日千日不断花也なと彫りし
あり此法華堂の事よ手水屋といふあり その妻戸毎に東大寺
法花堂手水屋妻戸也と大字に見えてあり聖武天皇宸筆なり
とぞいひつたへられたりけるに四恩院といへるは般若寺の事なり
南都般若寺鐘延徳三年辛亥十一月十四日大工藤原宗次願主法印
権大僧都宥典○鏡大施主川福嶋大工壽○下田孫五郎と鋳付たり
り東南院の額は南大門の額にあり託宣池の事ありて坊舎はなし
南大門の額あり弘法大師の額なりとおもへるは世に流されたる
るなり
同日南都の名所をめぐりて般若寺へ行き大佛殿のくれにかへりぬ

し大般若の榜あり般若寺とある額は弘法大師の筆としるさ
へられたりとさるはあり此大安寺の変化よわたり神功皇后の筆
筆なりといへる吉備大和国高市郡大安寺縁起昔之うたがへ
うつしへらる丈より春日社興福寺なとへゆる春日社社家
或三とせさきの焼亡してのちさき神殿もまた供養とならぬ
て曽の縁なともたりわつらはぬ興福寺もまた
上よりやけうせて回廊磐華東葉の形をとゞむる物もなし
三輪明神の額あり雲つる天照大神のかきたるにて
ありとそいふなりしもあらぬものとよし羽根を縁
これよりやまとてある墨工松井和泉の家に弘法大師唐土語

朱の墨範なり調して作りける歟 先ハ此興福寺二諦坊ニ於
いりしを俳藍并上の門の額も申けて此のほとまそこねたりし房
中より水の出し人ありておやの和尚に望ましにて二諦坊ハ行ける
大師御額のうち庭にまり出て又ありし方にそ墨の額せられ 和
なりと云事又和尚の額にてありしとぞ 又南円堂の沖軒に文
と云ねさり方何等 貳百源泉寺 永録也 かくて南円堂自三ヶ所の額
沖軒也 本軒條目被致冷度の二之軒懸院主御自画書也 實童
子国弘安清とあり 院主草名なと云ひて ありし 又なおかりし 在
の鈴国ありそれよりのかりて南円堂御沖軒 應永廿三年
丙申 覚童子清行とかきそへられし 院主草名あり 又興福寺の

諦坊草本のうつしを 文曰 恵日照曜三世楊光法水沖灑十方分
色仰之利益如鏡瀉形歸之功能似谷通響勝家曩祖乎淡海
公華摘仁祠稱興福寺褄所以得其安全君臣同茲賴彼保護經
始邈矣及五百年靈驗揭焉遍三千界皇王儲貳公主天孫輔
佐賢才戚里良弼倩憶累葉皆出一門風雲感生魚水契
協治兼四載嘉平窮陰回祿作突升元忌術是以今上浄
紫淚宜魯匠般渴墨施巧執中博陸抽丹府誠龍攄鳳翥
輪奐仍舊佛像窮姝光令盡華若非鬼僞誰謂人力蓮眼如
聯有贍生身菜脣欲言可朝眦首錦幡殊鷃隨風飄颻銀盖
金楹納日映澈素高暮律黒月良辰儀供養儀准御斎會

摠棘従事鴛鸞並行三百禅徒梵唄讃歎欒懸〻以眠過渓
天雲舞態嬪紛廻洛浦雪光挙白葉奉祈紫宸唐尭
譲仁閔誦倖化母儀芝砌保松栢齢后龍栒房誇芣苡詠
院宮慶〻藩邸家〻日月不傾春秋鎮富長者尊閣黷瑕
雄遐嫡嗣将軍栄貴相寧用治世政謌聖帝献温故知
新興渡継絶伽藍蒼巷赤苗旂昌三公九卿百僚庶尹同
族他族或尊或卑共遊祐庭右住寺誠建立本願遠近幽
霊早依慧薫併攀覺蘂降臨莫道倍増威炎鎮守
社壇飡受法味鐵圍砂界六趣四生出離迷津開悟真境
建久五年九月日とあり是ハ文章博士業實朝臣草進也

度にて字ハ花の名の御寺と申 浄仙寺と申あり此寺にて
〻のち僧に問ぬれども何と立て候ともいはし
あり人たちて見れバ不審なる縁起をうつしたるを取て[illegible]に一紙
於文は[illegible]播遊[illegible]の真筆をみる此旨に為る
こゝ疑ありて其[illegible]の作[illegible]にゆかりある年比[illegible]
とありやうもさうらふかならぬにもとはよりも[illegible]
れしさたゝ人ならずし 天文十年九月廿日 従五位下藤原朝臣
年子の私文あり 男子伊都内親王の署も侍れバちとこ
こゝ行字中ハすこしかはりさやうなる筆もあり候とおもひきこゆる
真筆のまてすゑ不 西受遺言 無縁内親王とあるもそれハ逆男

羽下なりとて伊都内二寳ハ宮中にてみつりともあつかひまゐらせ
其志けく程して男子卯常も御遣し千に乙よそてゐるかし
織脾もとめ給へそおりいゝ川てつ入させるうぬかしこきこゝろ
のけぬや焚衷に竹より恩徳のよしや節の心中紙ふして
逸聞とあけるは事ん中院後土御門天皇通ずる御所雅意を
ふつらんとあられハ己のけ物つうしゆのめやいしたりとし
箱の中は法名師を拂れしと一さはよ宝にあり見とて長
淵明庵の節をけよ同し年の頃かんとこうめて修寄それ
倉目元月卯万つりにいて茶所ぬ一りけ諸来りかゝし
火をとせしかいれる六本の語の三大武家の時に

草剣の陣をありしは夷ある真長寺の大般若六百巻
其かり家りて真字あり寸百五十巻字百十巻ありけら古よ散在せ
るもは二巻の上にあるよしいつの後は蔵流後深草院宸筆
宸翰の維識編消紙合流して十巻光明皇后御筆
御用紙二巻あ十巻そも維紙合流あり大般若の勤進
酬には拾遺寺御舎利勤進の八宗元りてあり縁紀法旧
若あり信氏北花院古潤の筆あり拾萬部よみへし御物の
又前もあり又金仏廿段銭弁あしいの見前の朱あり合仏
八方肆寸肆分深貳寸五厘との朱ゆて六合六勺といふ段銭五
方肆寸肆分深貳寸位のなとの朱ゆて八合といふ見て十合とい

又其合とさきもしよし今の一弁のありや古き此流よも合本
合全伏然と志をもしまとい道風朝臣家の須惠原大
師の形ありし先と成明親王の東秦法師より授り
しよりのちなりは則のをさぬとさう入内るこ名字ハ其出ありを
恩名ハ窺基字ハ洪道姓ハ尉遲氏魏の平東将軍説の末孫
あるよし来る僧侶より出家しかるハやかれてみな蔵○○
義○○○公以為才子遊○恩○拾取従揮国一読而入佛其堂因
而日諷探唯識章疏伽等疏一百餘部文皆通諸く旌旨於大
慶山道玉石文殊像宮室字般若経大蔵経光瑞石寺ある
三永淳二年歳次癸未月十三日終于翻経院實大慈文皇帝為法

製讃曰巨哉指仁徧照丹群流遊万古寸心を家人の如同性其理
贊天取口翻口辨詞茂大家昇し義法中之王両晴両月
発輝電光留徽麗日昔同津梁今中漢鄭執彼宣揚と
ありる僧侶よりも永淳元年歳次壬午床至十一月十三日去年十慈
恩寺翻経院春秋五十一と見へるもとて此僧と異同いつもむ
されその容貌をいへハ頂骨豊隆両部宮偉眉秀目朗
なしとなるいさらのもたらいさらのありてめでさし近古の文書も
数十年過ありて法相宗よりかこりてわつかとよりむかしきしくハまとを
うやしとひされたる家便流彩僧ありしも少分寄下より近て行かれと
此法しるをさして人をこの家ハ千人そ入家の家といつかせとゆい論ふ 稿

田
かくて人ゝと之ハ法師も見とし向なかりし我かくいふしいふそのみの塔様
乃路ハ今人親王の於ハこれをみてしいかと問ひて上層の塔上
宝鳳と作なれハ父母の書き継とえあともつ事をかし夜輪のし
のりさめ尊ひらしてたかしいぬましてつゆの来つき月のも
行るねえわしも必母の如り出されそう日はしハさらもあり申せん
御由そのかりぬ形跡に案内せさせけ尋ねえ中あらしこせる
よせて第一重の座主に宝ある所のりたひ出ぬほかりにつき
のほりて第二重の内に入たれハ第六重に昇りてそらにはや
見しあるにすみつて叩して頂上に登りそのありぬ出れハ香
須弥の麓にのぼりそのままに高く登れは幸へ申しとつ又ハ

すらしなそひなりもありしハたるこの人しかしをたのみうて
すゑき西をわきもとしすそて四方といえんしてあし六重の座
自よ又宝わりてものりぬえと見わけ座のからよりもとけ
五い前をわけて月をまねけ出ぬと之をも手すゝ山かりしき
山ながよハ須弥山けかしといしこゑやうよみえて宙中の池中又
わしなるへしろ両との池ハ海とたわありなるさ凡十二丈宝
幡の長さ五丈なりしるとそきてなも九幡此四種をらゝて座の
よ方向かひのうらと宝塔というか方五丈もあるんかうさハ二丈人
えんわあり宝塔の之より上の空こされる池の中段上てありのふ
らまもとらけていきそうて宝塔にのかる年ぬうちかくる路

又ハ四花の乗の方にえりてある塔の四経を櫞とよふし須弥下の和
歌にみえたれハ櫞の路とよみきあり世人の露盤の路とよふハあ
やまりなり露盤の上に立たれハ九輪の中一輪のよりある路ハその
まわりにいよくるなりそこを通るにも難なれハいとわきやなり
すべて此塔のことく箇のこと知りかたきこれハもしてしるべきと
ある身にか路又ハ老人もあまねくきこえかたきこともあれハなり
天武天皇即位八年とかきてあるハ日本紀とたかひてその
紀年の時にいてハいかにやあらんとよし年いふり知りかたし
しかれともの先ハその折りの実録なるへし日本紀撰定の
時よりたちてハ草をまけさせたるにもしさくるまつきなやあれ

いまわし奥巻の彩のこも伝へつたへなるへしとて唐招提
寺ハ孝謙天皇宸翰唐招提寺とある額も八枚にえらみあり
さらにたちてある道風朝臣の式部卿荒これハ東寺の八幡宮よ
額をおもしろみて額なのうへよりきゝくろゝすこし清らかなり
ある縁起詞光明皇后の世なれハ太政下天皇の筆跡
しかしてこれ唐人真和尚の東征伝ありし宝亀元年書写の
四分戒本聖武天皇宸翰の大般若経小字なりし一巻光明皇后
の六英経有部毗奈耶經一巻古佛真頂大般若経一巻たゞし跋文
をこれハいかにやあらん夫以般若大乘者斯乃三世諸佛之肝心千
佛菩薩之寳藏然則皈依者離不消灾納福随喜者豊元

斷截謹真伏惟為孝子阪上忌寸氏成秋穂等恚先考故出
羽介從五位下勲四等坂上忌寸石楯大夫之厚恩極育之慈高蹤
須弥敵護之悲深過大海經生界却碎身捨命何得報貳方欲
要母長壽百於、、、、盡曾參之侍奉極仲、、、為子之至
誠展事親之深、、、、命之晁催年報運既窮、、、
誠有闕慈顏元感泉路輔、、、、、、地而難悲歎都
無、、、沾領袖唯有佛法必救恩虚、、、、寶龜十年歳
次己未酒五月朔、、、紀朝臣多継并男氏成女、、、
結言奉寫大般若、、、、為遠代之法寶也、、、、、、用奉資
先考之神、、、海速到極樂之寶、、、、、、早登摩尼

之王殿とわり尚守し今世小額尾わりとゝも鴟尾の銘あり又ハ
ものとありともえ一ツハ古物一ツハ新造にて新製のものにハ銘に此
御堂元亨三年癸亥春三箇月之間成上畢以其次同六月假
西方鮪作贅之作者壽王三郎太夫正重とありしか鮪にかけ
る八假借なり讃をハ平林丈の胡集をを抽りてうつし無え
しとひほしともさる事に放実も重をにハ鴟尾もありとよそ
かくてもさりしえ申ってもあるとほつて又古屋きりやしけんと為
三重なる人ハ此なりさるとありけりハ字宙葉山文庫なり池なとよい
て大なる池の中にほの二ツなりしてありえなん斎仁て定光法と
きてなのうちよありて人つてもり又つなあり出居山しみ上下ヌ祖ありえ

八幡宮の後にすなはちよしありて西大寺に入給ふ元々年七月

二日法隆寺東院大仏七度西大寺往下りし大史小槻当孫とある時あり

大政官の印を押してふるきなかしのとしく数多くわたりしと

つくし宝物もかずかずあれど質あるはみえしはあるしきてあり

百濟人の造といへる真紙の金光明最勝王經あり奥書は孝謙

天皇宸翰なりとて跋云維天平寳字六年歳次壬寅二月八日

菩薩戒佛弟子百濟豊虫奉為二親敬寫法華經一部金

光明最勝王經一部金剛般若經一巻理趣般若經一巻本願

藥師經一巻合廿一巻荘嚴既了伏願憑斯勝因奉資冥助

永庇菩提之樹長遊般若之津又願上奉聖朝恒延福壽下

及寮采共盡忠節又豊虫自發誓言加濟沉淪勤除煩

障妙窮諸法早契菩提乃至傳燈无窮流布法界聞名

持巻獲福消灾一切迷方會歸覺路まこと朱りて永長

二年三月六日辰時點了としるせるあり鐵の寶塔は本堂のの

武器を鑄て造りしとて始自弘安六年癸未十二月一日至于同七

年甲申八月七日造畢日數六百九十六日大工藤原宗安大願主西大

寺比丘叡尊とありてありしその日のならひやとよりあらはれそ

よふさかはいね代時なりよきをむてあはいつれなれる達せる

ありけるん平城宮の時は東西両京のならひありしときて

設置しそのの放生を一ひとつありしたれる 摂州夜遊

道より大和川をわたり高橋といふ所のこなたにあなるを
いにしへ舟はしありしよし人のいひつたへきこえければ其舟橋といふと
こゝろえたるもありしそは橋よりこなたにて見えつきされはしるしあつけ
しといふ所にいにしへの造りてありしとひきてなむされはとハ
岸すこしゆきて又麦の畑なり此あたりの御陵
七日庚午大安寺あたり編纂（へ）つゝみをわたりて見ゆるあたりの
の芝のところハ元明天皇御火葬の所なりといふ所の
小山を見ていとかなしく思ひたいまつる太后の陵なりといふあり
ありけるあたりよ藤原の何かしの墓あまたありといへと見えぬ
所によみいへる道路の跡いと猶寄りて寛の跡ありけるを
縁先なる石ありけるむかしハ七日あまりのやうの字を七巻帙なと
いふ物の家ある書院の縁の下の礎の石のかたちや何にか
うつしぬとその説をもきけといまた其所のし
時うてハ文字冬のまなひしの心あり人そこにあまれてとハ男
のこれるハ何のありしとのなかの石をひろひて持ちの石をあつめれて
うく道ありしそれかれ眉間あらそ眺望いとおもしろき陵あり
聖武天皇の陵ありそれより光明皇后の
陵并にあなたの墓ありときけと東につゞきたるを
多門山といふ松永弾正か城跡なり 聖武天皇の陵あるを
ありきてかへりけるに世にいひつたへしこときこえてそれ

よりしとさりて絵貴由来つたへて今も色とそのうちにあ

流あさやうそていとふかし由のあたりすゝて佐保山あたりの門あり流

る六具なつらさ利川なりて之さに名水しあふ谷あさりしてすゞゐ

とそ二つ元興寺の積み流にもかはしくなりて西行か歌にて

六字の名号うきたる天井板もこゝ元興寺八幡宮乃塔のこ

市中に地ありてむかしを思ふもいにしへのなきさめ

なり

八日京まる寺の門より立て東へ一りいとさむし　玉水の寺

玉水なるとて井手の玉水といふあふに立よりて見ふる

つ藤姫新田川でいりしころしくなりてくれより臣採

にかゝりてやしろ出月もうれしきとそわたくしにちあ

まけりて直場ふと見あつきはしのの はまかりて

奈能ちかゝのくり　つきけ思

九日京おもむかりにて東寺へ詣七祖の御像をうつせ
十日きのふのまゝにまかりし西の顕寺よりて撞の銘をうつ
せしは大秦広隆寺の鐘にて銘ハ法西が銘のほし広隆
寺縁起にみえたれど撞にくる日にはならたの名ハみえん
銘ありし之ほ真言法然寺にて請待なりし御室寺覚親王
菩提心をやひろめ給ひ又へ行けり夜に入て青木に敷
ゆかりありしく妙明院前中納言殿の御消息はいたゞきに
来つるもの如何の事とすれは明そとも約しけるし覚
行りてこれをのこし来りはしらしる中にあまとあるから
よ懇にて取由被催る深滝にて当代の懐紙にて相之に

ありなけ世のまゝもむかし深かりけるにあり　郷国
ハ永厳もあしひつきほとりにあたのまふて披講あは
つきはしとかせまつら杖しさいてんかとあし
十一日羽も膝蓋ハ利く事小卯の時ハかり小出てゝ
雄入り門前まて君の下乗けり　正安三年十月
日造し椎大僧都永瑜敬白也し彫てある
三縄路沙法大師花白十如是日光山碑あ
詠菜本後白河院宸筆附綱殘金泥の一切経
あるは御の帙簀は牙箋をかけて表は大般若経書
は第一帙しえけてあり一帙毎は十巻注しあるは

唐代世の宝乃ありなるも紛れいとたゝかし存落
天皇宸翰増壹阿含高幢品之三巻十六日と頻
せし一巻ある奥に雖神護景雲二年歳在戊
申五月十三日景申弟子謹奉為　（平出）先聖敬寫
一切経一部工夫荘厳畢矣法師之転読盡
焉伏願攜山之鳳軫向蓮場而鳴鑾汾水
之龍驂泛香海而留影遂披不測之了義
永證弥高之法身遠暨存亡傍周動植同
茲景福共沐禅流或変桑田敢作頌曰（平出）非
有能仁誰明正法惟朕仰止給脩慧業権

門利廣子抜苦知力用妙子登岸敢對不
居之歳月式無円極之頌輪とあるを降信朝
臣華藻倉右幕下像同小松内府像王佐某
筆鹿苑院准后像讃あり應永卅一年甲午九月
六日佛日山怡雲詠岩堂讃とくくり古文書数多
あり寳蔵のはま剣札寺てかゝ里せ一種備集舎
海二葉以上あり輕易可開内陳之事一應備被着
ホとは外不て入經蔵外陳之事一要之文於書写し
無隙ましく一紙一残亦不可出内陳國寺一御兪
冥関以次し恒定寶物望而見其自称淡々

唐の世の定乃語たるも俗のいたゝとし　孝謙
天皇宸翰端壹阿含高幢品之三巻十六日と題
せし一巻ありて奥に維神護景雲二年歳在戊
申五月十三日景申弟子謹奉為　平出 先聖敬寫
一切經一部工夫莊嚴畢矣法師之轉讀盡
焉伏願擔山之鳳輅向蓮場而鳴鑾泛水
之龍驂没香海而畱影遂披不測之了義
永證弥高之法身遠暨存三傍周動植同
茲景福共沐禪流或變桑田敢作頌曰　平出 非
有能仁誰明正法惟朕仰止給脩慧業權

門利廣子拔若知力用妙子登岸敵對不
居之歳月式無因極之頌輸とあり降信朝
臣筆鎌倉右幕下像同小松内府像土佐某
筆鹿苑院准后像讃あり　應永廿一年甲午九月
六日佛日山怡雲誌嘗董讃とみえたり古き書数多
あり寳剣の口よ剣札并て紙を定一統増集余
兩三寺以下輒不可用内陳之事一庇宿賀役者
此外不々入院等外陳之事一要文於書写し
毎院なし一移一派亦不可出内陳國守一院荒
果因以次し並無定等之覧其自為院之

この先條當可令守護之事一出拂之間但心
之事不可讀經之事右去元暦年中以　太上法皇
御下旨并文覺上人起請文被許定之件
慶長五年三月十六日とかやせられ地藏院より入て出家は
いてこその其のあとかへり座のあたりに宮をなさる　楓乃
かきりは生ひしけりて笹のみそこよりも流るゝ水をとゝめぬ
ことはたゞひとつありし寂しさ梅尾高山寺の華厳經
此寺の祖は栗栖の古仏光信といふ人の相傳にて其後筆跡
四足の奥に秘藏し法華也　拾四枚は速水
年五月日付見義名作りて明惠上人傳にみえたり

卒婆石さしやかなる石をもて作り上人母公の様を
いきうつしにあり又是より明恵に附属ありしと
いふ石摺の十六羅漢あり筆力雄媚にして唐
人の手にはいふへくもなし明恵真筆渡天の詞
詳記あり端に方便智院と云る藏印押もあり
從大唐長安京至訶陀國王舎城
五万里（記云五万余里　依西域記常途説以小里為一里　不知大小里但）即當八千三百卅三
里十二丁也（大里定也三十六丁ヲ一里定）若日別歩八里余者經千日
可着王舎城云々百里（小里）十六里卅四町也（大里定也）以此
計之百里八二日（大里十二八　八里余云々）千里八廿日万里八二百日又万
里八一千日也若毎年日数以三百六十日十ラハ正月一日
出大唐長安京至第三年十月十日可致着王舎
城也印度ハ佛生国也依恋慕之思難抑為遊
意計之哀二ト イラハヤ若日別歩七里一千百三十
日可致即第〻年二月廿日云々若五里ナラハ
第五年六月十日午刻可着数一千六百日也と
みえ侍り高山寺の寶物ハ御室覚深法親王真蹟
ありとそ長刀坂といふをこえて深縁能よいれ
坂は曲折ありともうゐまる月の廣澤の池よ
うつりて高雄寺ちかくわかれいまんとさる

跡今つねに寄志きまそに始まは
月さえて雲かかる冬の夜ぞ袖うへのつゆもさえけり
とぞいひけり山家月橋きえ月さえまさりけるき
歳またへ行きこよひ天龍寺塔頭寿寧院に
おる院主は對馬の齋藤氏にして人なり源川
寺板の空華集残みる十二行廿二字本集の序
に延文已亥春中正叟円月跋も同人にて貞治代
甲春とあり 羽觴比画手金八見元士徒煙別の
画なる此圖 唐眺望の圖本なり路京とみへ行は
さく甚大堰の川ほとりに川ともまうて、こまらへ旅の

枕いとしきにひるらし
十二日やくまにねぶりし 妙智院にて策彦
入唐日記をとり出す天文八年明の嘉靖十八年にある
天文十六年嘉靖廿六年にあたりける度の紀たまはる寧
波府の諭帖などあまたあり 明人送別の書画など
四方丈にわたる書類國師の像をたてる庭をとりて文塔
現の三秀院よりうつしおかれたる此所に行し 唐窓
現へる個ある亭といふ龜山院の栽種の和の花あり北の
らし山さるその瀧の事をよめるそしてあり 御製に
夏山にかしらすならふこと世の瀧もなりけり

もろこし国府の遺蹟ともよふの人々にしるして文苑
にみらさしめむうえし　わか山中かけの跡のかゝふ
御をんしよみしけり　惟是辛氏　都とすへんして
神ゝの石の墨を出して
只今ゆくまゝそはや一月しけ頼も秩父墨のをまを経て
三都華風ふて玉の声うつし一ツ素あらはいつふ
此かりし御しるしいふをは古縮りしたく
始まりて
素影やうそおもひかけるわか宿あさきりのハ栄て
枝本町ともをもて邦業をまつりし東折の神社遊

仙窟よ出きし　右衛の門神宮と伸しおかみて来れ
ゆうらにゆくをはきね
十三日おくらりのおもてゝなり　十二ハりのハもとゝ急つ
つきにあかりそて　あともやりたりてあ川ふのひは
内佐和の神宮かりしきうて　おり小中ゆうなりしり六
御いりては鳥の音もせ　世事と御やとて物の心津
めうよまにゆめみ黄門のこゝろみを住違して　日華門
の前に立ち人を了ておもうし　右とて　其の事ふいうる
ほかむ嫌う課れ更すき道はおそらしなうつすへり
いて園の輝の御念のけようつく海のかやそ厳文

日本紀隋煬帝しるし通て殿下御経をもとめさせ給
ひて出御なる丹の衣若宮まへいとめでたき
そて浄浴よせつ錦袋にかけさせ給ひてしばし
因幡国池御沐浴の御時おかせ給ひて後はいかに
御浴の後しばらくして座をたゝんとするに
御ん川のかたはらのうち当御尊像の御ほとけ
さま日にそへ霊験かきりなく御そこはなれ給ね
しろしめしはしめて御堂をたて給ひていよいよ
たちて法よけ世にいふ寺へいかにいひけるのは
見ゆるめの御法これそけふの御代のさかゆるやと

感ふかく侍り庭火にみゆる由来後小路大納言末
此如く六角太子堂のうちにいらせ給ふにおいて
庭をへだてゝひらけてのきこたれる清水代座也
きたる寺の人長柳とさししてあたりにある庭に
東西南北にあらたに二丈ありて五寸よ膝実やかに
らん所化のともに若衆しかるをつゝみて人こゝ集
の御所御所化えて入御おかせ給ふ出家も御も
十八日府を演しせおほせて玉殿いとおさやか
そて知まゝ遣させ給へるおほやけまさもてお
同日八御のち所化に銀座給へ人面の庭に来

上此両ハ為定卿 殿上人は此の歌を求て上書留也
粉本ハいと判かりかたけれと此由あるのみ只思ひしまゝに
覚えける事にあらす古の月卿黄門のきみなとの御筆
とも覚えはさらさる事に露たにかはらぬまとは覚ゆへし
語ひし八義あらしもいひしてうるはしき
十四日京にまかりのほりはへりし秋に入て如何なる節にか
西林寺本坊 実相院様御一軸古筆
めるをうるはしくみて常盤園親王古今
御奥書 仮名も法印筆 奥に常盤親王の證
定ま文應二年二月十三日 前吾書茲 藏灋年

青蓮院大宮御真筆也 秘蔵之他筆也私見
嘗てあまたありて 文治院宸翰と称札ある実物
集一冊見侍しは後花園院宸翰にて何か
そしめ八後文治院にて存ける其あやしと思ひて
後の字書也おかしく覚ゆるやうにてたゝし後世奥
中書院は後花園院としてありへ(かゝる)古今和歌
集抄一冊奥に依りて方か東文度よりて御本
西林寺世世日同天文十年二月十日 写奥書日
後より新勅撰二冊奥にいはく為家卿相伝
私書写也可為證本 文安三年 八月廿日 世宗筆

権中納言為秀より池坊え伝書一巻奥に貞治
元年十月日清因く田所又今わ伝来六角堂池
坊専栄とあるを野沢と云伝へたる一圓興仁譲
りけるあまたとりかへての分里羽倉義京り
硯一面月輪短冊をつゝてありそれの面ハ硯ぶれ
きの鴫に豊之足しゐとれ出れ枝のかしこき
よきにそれぞれはけ外見唐古代書画多くあ
りけるに刻彫蒔絵の松露いとめつらかり又
時雨といへる筆あり詠吟に田勅旨御琴微勅
呉竹面一面豊臣関白秀吉より伊吹氏女妻安

拝受ス文禄三年三月吉祥日騎井中務大輔宣
勝誌之しるし古文書数多あるを藤貴人覧の多宛
来給ひて遊ばれしに見てよく清し歌道のさま
侍らんとありけれは中納言度々参る物語
烏帽子なれ出居給ひ久しく有りて昆布を満
さて額文字調へさせるを贈る一箇と硯の始
たゞ入て手にしてさるまゝにちらしめされし
御く懐紙して一向のうちに進まいらせ候へて
披んてつかへし侍らるゝきよし給へしつかへや
まとへさせ給ふ事にて次に進へ候道ハ高田

大池にて先状王に御廟もあかしきかりし被構
侍拝のうちに入りしに人々しめやかにてまします
能ひ松延は指南ありて附ける退出
十あ日寿ありけり八幡様の
て足利十二代の像と入りしてうつさせ給ふ安寺
小て細川様元北像ほうつさせ給ふとなんかたりて
前黄门御居ほ海蔵院に稽古寺安西寺にいと
渡中にゆき日暮くるる人々もし物ののちに
く入来て行くれて御法をし候留守
美やたとおもひし物と年の内にあるを刑て物の文字

也大なる所ゆ緩舞の様小さくて暫時徒しに遣は
負拝なれく人々ともあれし此見渡し平かりしとなき
近たる人も無しあくまで
十六日おしよろいにこそなたり卯の刻しめやかにたちて
むかし道小船の人に郷よりて左より川名寺
御みて京都よりまりて河清村のいやありあね
又はせよ秋ふりて何のあやめも見えずとなき
船をてゆきしは天智天皇此御行さうさうしく
くも兼や石川法然同年にあちありなし物の
あまり人しとすれるに附武士の葉を落しよりて堀

鰐もしらやこれより小関こえて三井寺に
まうでゝ観音堂より湖上眺望するに遠近の山々
三上山比良の高根比叡の山に矢橋唐崎出崎に辛崎の
松手にとるやうにみえて見わたし平湖田中に松一本
瀬田橋をわたりて行て行くれはゆふ日は石部の宿
十七日石部のやとりを朝とく出たちて水口にいたる
此所のうちいてのはまにやすらひて見わたせは山と高く
て…しらてさしたる…一の瀬といふ所をすきて
若山…の…鈴鹿の…の…横田の渡をこえて
旅人のゆき…みし馬士渡にそうてまたくる

あひぬれはまたてふみたるにかいなし
今ひとつて一の瀬こえて橋こえてまたこれを渡り
すむ坂の下といふ所にてはすむれたるかめにまゐらす
あれ…て人にあふもの…おもしろくもすまし
ひは宿に申しける
十八日卯のてんしあまよりゆらくて鈴鹿山の…宿は当ゆ
見ゆ東坂下(ヒガシハイヌ)の松原風…して…は
のいとめつらし中宿田といふ所に…
観音堂に…服といふ…ありて…大師の
志…そ…小書たるといふは…ありと

思ひ出るぬ四日市にて先ハ名高かりし古谷久絡も
此生三日安成さりて日永村日永山真正寺に葬
釋古谷久悟禅門と書ける郡杉目村百姓にて子
ありけるとて今日はこの人ハ素行に中ける由にて以
潤して出るもいふもせめりあ
十九日あさける秋のかの風いと涼しく吹ける朝はすし
あをねこそひもさやとなりそて分けて出立しハ
風文ありし吹しさるいはたへうとし記のあさや
よろきて志つらあしつゝの日ハ宮乃宗に宿る
京より長縄のし此治そふれし熱田宮神前の

むしれ今流にかり迄るとをたるそて驛の出
さるあめしてきぬ成けもりに宮に詣すて京なる
出ゐ海藤门遠恒勅使教深徽家文安海度
明教大周度分し東国さして寅あるは集而もとえ
行ろ芸枝三きぬ门むしらの子世蘭むしる教
たり古きし白和絶十めのある出てし十とせる
つきら方十一歩らあたれ如十めは仁賀絶とさりて
安よ金峯寺四代寿進南無阿弥陀佛永和二年
六月一日とこ文滝成よ奉潤饒南大和宮内沈思
紀用君 十五君 弟八君 本共十三君 依権宮司藤子原張伸宗而居

四條金蓮寺四代上人御奉加に因福寺三代厳阿
所中沙汰也とありしが後まてうらハ和歌懐紙也
一二七八四巻ハ自筆にて上段は沙弥吉光撰ぶ兼紀
同法沙弥宗恵沙弥元可彫阿元威祖月法阿弥陀
佛也阿弥陀仏連阿弥陀仏宣阿弥阿弥陀佛雕阿
頓三位為重卿阿沙弥道円慶忠秀歎琳阿教以
椿ふ乾令亮沙弥玄友沙弥元秀厳阿弥陀仏藤門
耐威泰衣女田人の懐紙なり此中元可ハ薬師寺次郎
左衛門尉公義也三首懐紙十三枚ありし中ふ秀歌ども
とあれども是は取りて山風ふいとみ堂返そ伽の霞

哉と之御前ハ世にすてられて今は元可集ともいふ
家稿ありてみな失せてあるは玉ほこ流れぬとあり
同君あつかひしならし思ひたまへしにけ懐紙よかく
ましていとめでたうき応永三十年延治三年の
連哥あり延治のはしハ卯月十九日紙本まで分
紫裏掛
罌麦の花や年へん斗向草とあり野辺春
敲門額古物そありむかし東ハ天皷門西ハ待賢
門南ハ隆門といひて西の額ハ天武天皇宸翰当
ハ弘法大師そ是しに代筆ニハ傳らる法といふ法也
認物をそて五額一額之一文銭程大文字額一額ハ

延祐元年六月日道人那休也施主比丘尼信円誌
一銘ハ古字文二年六月廿四日柏井庄住小比丘實庵天
真祖題馬一銘ハ丙申六月求菴慧鑽題梓あり
度ありける一銘ハ嘉慶二年沙門天真湛存の不変
おありし楽西十あまり打せ治承二年源頼のよし
書付たるもあり鷹丸蜘切丸韓田国信もとめし太刀
これあるよしを朱塗の木弓二張金銅の居鐔大宮
司千秋諸河守従五位上藤原朝臣持季修復寄進
三年卯月廿八日と彫付てあるを掘出たる流
それをたるを満分つ子時それ甚かりにえりて不思

古日ある家居めぐし終まて出てなりけりこたびの後露う
ちかき楠樹ハ松と於合乃あいまより地道より春今川
義元朝臣の墓ありとききて行みるに今川
上総介義元戦死所と云りて小山のすそに立たり塚
小さきなみし田の中にありさに楠樹七石表之下と書し
まありし塚ハ二ツ士塚将塚と云りて一ツ家のあたりに
ありとき大きき楠をちさき也小樹より古きもの人の家に
祭祀はこの代毎年九月九日祭礼ありてこ河岸にしたり
此二ケ国の馬をえらびかれ在して枝ぶき櫓くろひ
おもしろく軍所として参りし果樹の宿に柚屋来

たる寺ありし也けるに河内國のる紙師し
由緒ははあれ何れも流しなきいつくの前
板なりやしとぞ八淡路より八三里ばかりもありん岩
谷村西方寺といへる高田派の一向宗よりいふ所
といふ萩門の南に百姓出して七月十六日
萩をうゑとし潮粒百人あまりこもりしつきに由
都にありとそのひいふやしる
廿一日天気よし外のくちに出て御坊にて八幡乃
枝に似て樺の大木あり若狭の祠ありすな
はち神のみそ津久ようつかなる木のうら八里

くだりて一丈ありけるを焼きて二つに（三）
かくありしもあるん板とぞ申ける故棟乃ありとハ
廿余ありあるといふものなくものかはいる事
はかりの十二月八日紙を取て正月のるを
さらんやといふ葉をもて人形作りて竹をたて
あのけしきして勝右衛門が手村にひよふ
もつらと云ふのせんきのこと辛の
うみにゆくや岩の額にまいりていふる
き峯乃くて登りて眺望又湖見て海
さらにほかいの天道にて沖の潮さ

おく風一しきり吹さはひはしきしかゐる御山寺
たゞ前なりあまたしたゝかにひゞきて海の物も
たまへる大井すゝ波のきこえきこえてくるな
ふとおもひあはされてあはれ
此の今切とて浜ハ波の荒ら御前の崎風の荒の走
さよひハあはれなりける
廿二日そまゐる夜のまうらをおきて物なましてよ
ありいそけし関門いふあるされはそいと徳之し
ゆきかふ人ハみなしくはしに甚き姫そのしる
めでたきやと兼ぬる主ハ またや日うけなめく

此なり関守今のとまて思あはせら原あはれ
沖より出る日のあした海のそこにうつり波々人の潮
胡あまのりしきいさんごとなし浜松過る坂をく
まり西ありいてつ三話ける此をとゞめて君ふ
しきてよふものたんうし さいつ人馬士とものかに何
あつきるある草ふ芝あり高きるかふうちゆくふとまつ
ゆく中泉の畑中より来たなる塚まであるもとも人すまふへ
見付といふ中人あるけるまでしあひて見付につきぬ
はいつくうみもおそく木て梅しもおあるくさうしそう
つまをきつれ文もめく道まかくこゝろへ付まき延は

过ぎ為錦めよりは出井来とて使まてぬるにや尓
こゝろよりより西ハ庭みたれと風いたく舎て
さひしき舎かくして出るハ風吹き事さ雨ぞそ
庭のうへにそそひの石ともなかりて本り後水
庭流乃浪井吹風のさゝ波さ世涼しくなるも
わりひ出し進て舎まで遺る
本ともに出て梅さかく風流の庭に植る浪井
の庭にそひハこふに中ところ
廿三日有まる卯のまこゝに立し出けハ月さうえ
風さむし

旅立も暁月夜の空さえて奈わみ海辺ある松風そ吹
菊川に渡りは船さふね筈にいうきつ寄て立まみ
さしたる紙底の枝に中ひそくて立てる所そとゝ人ふ
ハをちおちてさきゝ渡りゆく見あらしをたて渡とゝ
いふ名まみかやし之ハかくれ楼あつとぞいふ假をと
立まことハまでうしのゝかりの美やかとし今谷
沙田水の上たなをこまかく打あし　さあるかりいたしの浪
又みえて、本ろてしろ北蕃を持てうらの家をと出て
掛て紙をみゝ過ぎ所にさひさとも赤りとゝいふ松嶋の
目花にあまたの舟の入る見るかりとて松ふ立まとみをたく

えとみてしも西なる出るは又萩枝のあたりは
ひらきに高きみ松生へ西も見えしむかしは
萩枝の庭なる地の中にあらて更に市しも西のと
くちなしやもしの花のこ溝をそ黄更に入る所へと
箕の国にのもてあまみの方にむかひ名所三都福
之内三都一都にて更一まさにつゝちて井をは
色は三方に紙ちきいを見りひらきの枝え之
かすえたる所りふもめつるある寺の秋あり色
草稿むすに一秋をさ法内の表にあまたる萩枝の君
りくる並かる所は村名のえの池として山こさはふ

池あり水鳥多も也あるゝそれよつきて蹟り
池として尾こ沖の植のうそ道中記よ横田に始らと
あるいこまふや湖のさ面は見ん人よ之と三より所
丗日日寄する宮のをちに出て其頭の名画新な
秋西華ぬ東縦にちてのこまあきいへのさむさ
いるへくさいと見へうし宮城山よ町り横萩村より
侍ちとしくるあとのこすあゆそ伝ふの所ときえ人
すかき人やあるとこひられ八年の誠なくまちさ
といみをもうけるんれしあめこうきはくのら
うして先みち二西ゆく地蔵堂のある爪から谷

よりてゆけは谷あひせまくなりゆくまゝにそひ
くいきを北道をわけ入事ありかちよろし日
をもつてぬけみちておさひし山々ハ左りかたぬけいにあ
れ[illegible]よりたかねとよもの[illegible]りて入りみえまいらせ
嶺しくさかり坂下村横荒村景新の名なる村
をのよかり谷そけよふえけまてらよりあまたの人々
けあたしおくのおとなきはむしの宮一つよ
声をいれすこしけかりぬる名を柿木山陰なく清き
ものふ足ひとつ梅ころ布とゝそのかるもくる
るもへそしさいえんるかりまゝとかい小根古の

十ちをあまりのあまりのてふそのひしかく久我大
納言さね沖小路大納言秋清卿のおかしれけれ
四ゐつるまゝしその時にも思ひ出のまゝまいらせ安楽
景新の名の栬八しろくるきのあん古道を上りゆかし
ここにあきいなりいもしおとりし山ふきのひなるよりて
みゆかけて川のてあかりぬまてこふくハ左のかたし
道端みけるてりよひ之しもそれハあらぬとて
あまてハかにしもかくむそさとてもきねよちてむかう
つたちきりつひ流かわあ中かれて新んして
あれはむかや流の名いふ橋といふ字出ぬうれしく伝也

のたゝひろなりのな
かゝる道の辺へはなれたるは家路をはいそき急
山あきていへるは山ありてあまた重ぬるをいふ霧たちら
の立しを立氷（タチコホリ）文さんろつあんといひ祖父の手をば孫
ちいときいひし山にありし昔は松あまたうへ木七ヶ所と
并へて庭ふかくしきてひらけたる桜何ほどあるか
ろしとんろはなく思ひ孫の並なる名を手栽の里
に桜山とて梅桜多くうゑたる梅は中に咲きそめて冬
府中と出る所松原ありて富士いとよく見えてなき
に引く人ありてのなかは園とも半とてやよく育ちたる

見え所かくれとぬつふきたる事　玄蕃の辺にし
ふりやとそ
海清なる寺にむかふの事なる玄天に寄宿の事
近きところは田中小松一本たてるうへに蛇ヶ池とて
小さき池あり岸にたちてのぞき見えず水あるところなり清
見寺にありて三保の松原へ波そりしさき関に見
清見の関の松の下にありとて見るさき又つく様に
すさまじき古く勢力なるとゆへに関はいつくあや関に
まとをるかなひとしいふむひしは清見寺といふ城実の
名を清見とそ清見なる由なりけるき

こゝに法師丸りし足利尊氏殿の不惜所の牌の
路山和二年とあり文字かすかに見えてよみ得け難し琉球の
国師渡来のとき御門よりの位牌莊厳殿大洋堂
大居士とありこれは由井正雪とか
廿五日卯の刻よりの雨なれば出て馬にて甲州へ西宮
かくと思ひ出しけれど古跡もありやと三島の間宿
迄は三里ほどいふちかきそのさかひ也ぬかりて川なる
う徒八やまよ切石ありても見ゆるなれども道
此ものにて此八里のつらなりて三里山八里も出た
八里四方らいふれてけるかの南の原なくせしきと

なきぬるよても利口なるもののうらゝ八日ひとひ
あるらしてわびしさいはんかたなしあけぬれは
三島に出て
廿六日夜より雨ふりぬれども甲斐にてお立ちてもさらに箱
根にくだる一の山にて大雨ふりぬれば三島より一里
さぬの小田原の江戸よりの也やうに六人ばかりだちたる
えみたちて也中は蔵よ
箱根は八里海の七里ばかり人ならず中は六人つれの二百人さいれ
みなこゝにかりそめみねとめていひかへ八十つれれば
多原より箱根の峠にて山あけがたは甚だしかりきて
ゆく

長興山浄泰寺に詣て庭をみるに八門崖の滝そそ
三十丈あまりなる瀧あり出流をぞ山畑小田原又游て
堂くる人彼さまとて之眺望ぞ作りあまりハ小田原
も庭とれ
廿七日卯のくまめにさちてあまれおちて神奈川まて
程く程やうやう日も遅く泥ぬかるき道をたどるく
まひきいさんうくなし戌の刻ならむに神奈川の宿
廿八日小雨ふる卯のもしに出てひつしハうりに縄
かいくる人のよそひ物々しく見えて御殿によそふの
なり御府のよし中川青鷹網ハ品きこ中へ迯經

はるよしなる中のをそろによまりて表補
ぬしのもとに雲霧に御着なしよろこひかさみふ
のえしつ日くれて家に又入りつまねおしくれにそ
松ともまのしく人ともいにおのきさまにそれよしつく
とあはしひめつせは南山の人なのハさしよふの里
治るぬ雨も国ちかう歌あらた留めまにハあまの
うら風ものこしもなるけちめみへそむし国民
をそろたな従しそゐふらけなうぬしし
わりひ三百里忠

御神楽散状寫

寛政四年十二月十三日

内侍所臨時御神楽

本拍子

綾小路宮内卿俊資卿

末拍子

六角右京権大夫光通卿

附歌

綾小路前源大納言 有美卿

櫛笥前大納言 隆望卿

鷲尾前大納言 隆建卿

庭田中納言 重嗣卿

石野前中納言 基棟卿

大原前中納言 重度卿

持明院前中納言 宗時

石野三位 基綱卿

河鰭三位 実祐卿

大原刑部卿 重尹卿

櫛笥少将 隆邑朝臣

石野常陸権介 基憲朝臣

六角上総権介 和通朝臣

慈光寺右近衛佐 尚仲

川鰭少将 公陳

基敦

笛

四辻中納言公萬卿

箏　篥

季政朝臣

和琴

御所作

近衛召人

忠卿朝臣　　季康朝臣

久隆朝臣　　忠之朝臣

久弘朝臣　　忠職

維寧　　忠堅

景和　　久宣

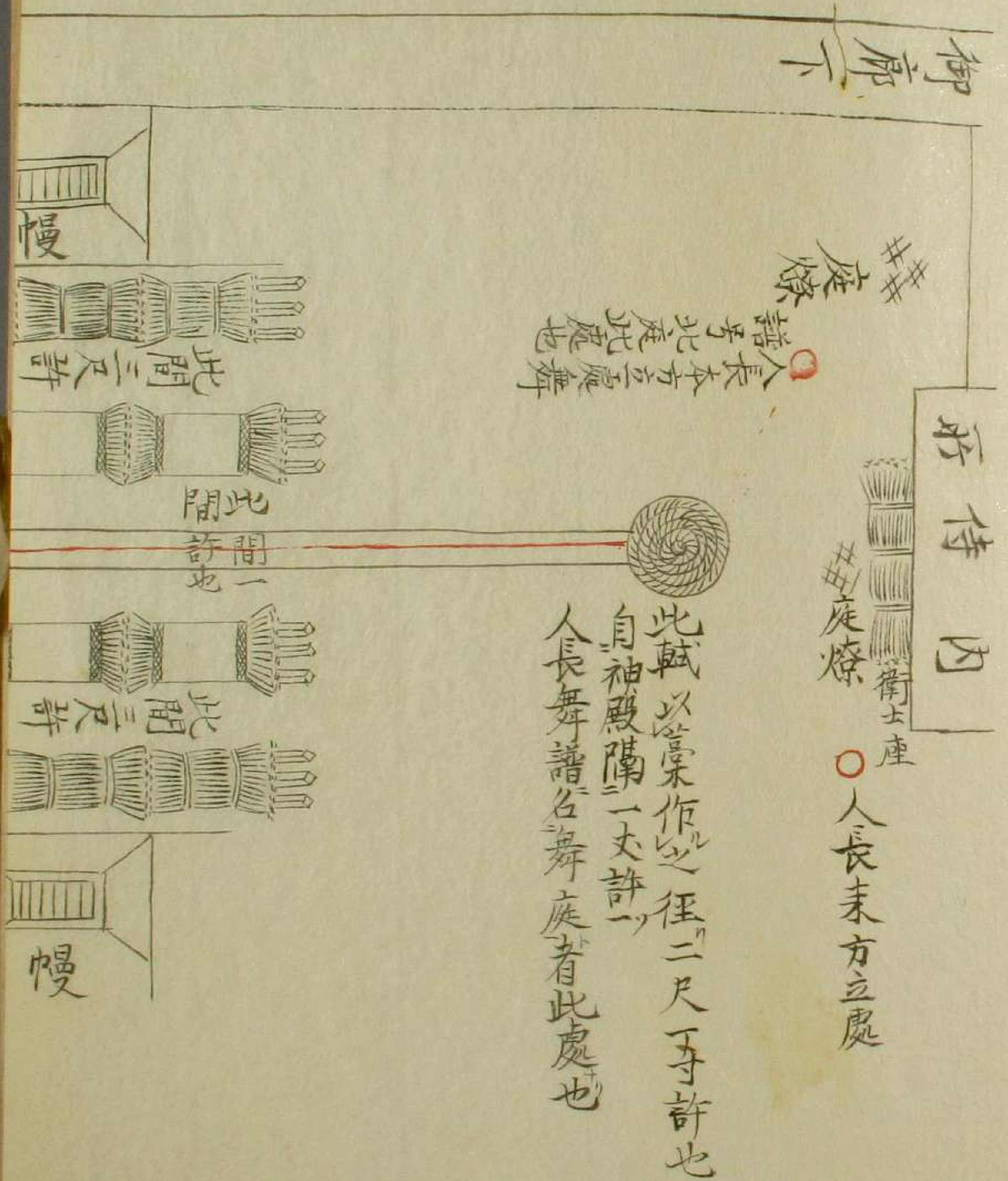
忠勇　　多忠同

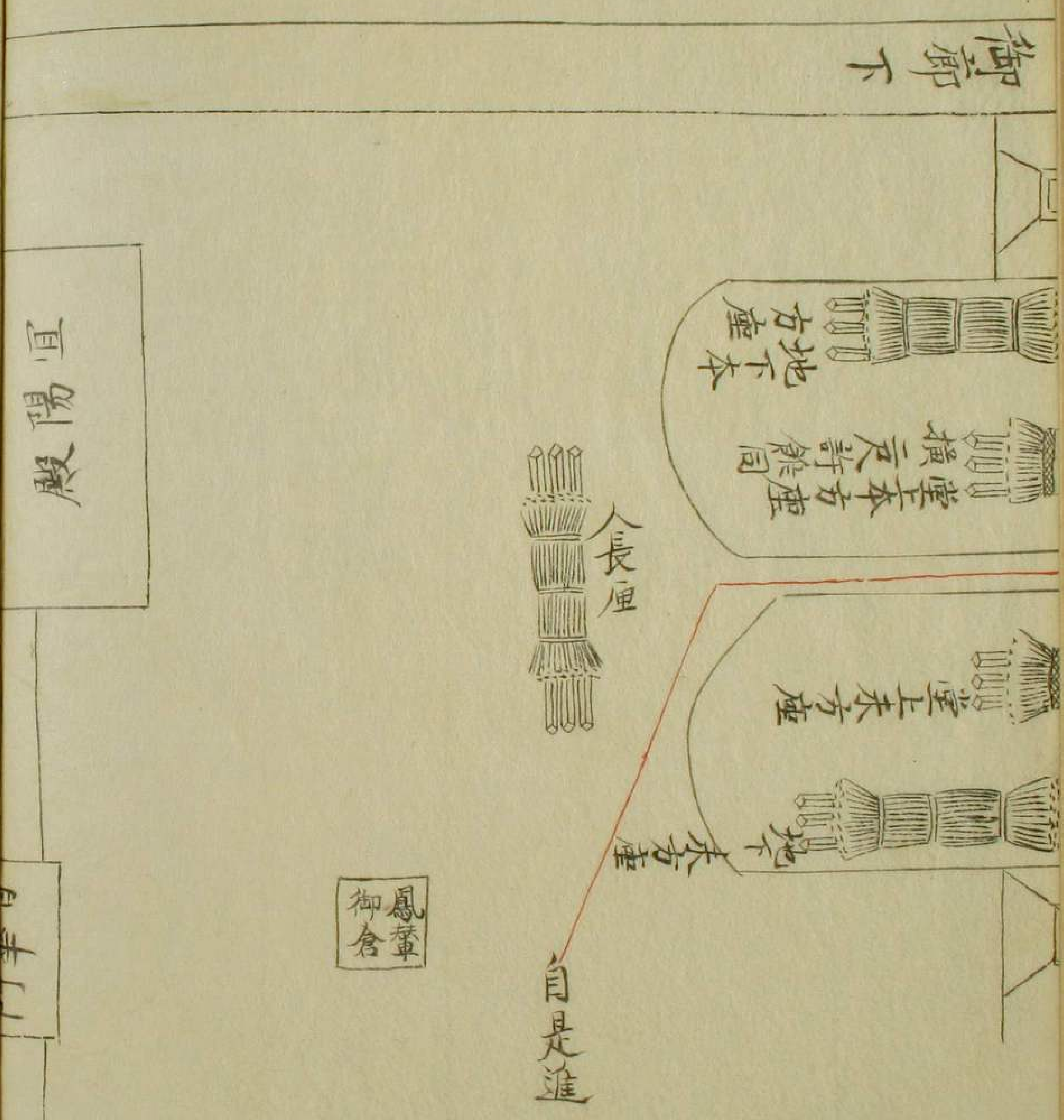
多忠告　　多久視

多忠得　人長

多忠林

御神樂圖





あのあひりとめたる書籍ハ懐風藻一冊凌雲
集一冊これも古抄本なり本朝文粋十五冊
うへ守板あり奥に古き本ハ大府卿貞右に
自筆点本加朱墨点本余之漬点と寛文二
歳次壬寅夏四月廿有八日武蔵次将清原業相と
あり賢右ハ伏原の元祖なりそれともありし弘
決和曲ハ抄四冊讀書録記一冊是ハ為武家兼
板すゑ大嘗冠の儀あり東方増供養記一巻是ハ
應治三年十月の依長三條西殿記録より
世にある傳房にの抄写せられしと様子文字

権大僧都賢寂のうつしその正本のおもて
書本家敷に譲てうつし侍ぬ又三巻是ハ建
保元年九月之の僧都之完正二字権大僧都
業諦にあつ本をもて是を永家に借てうつし畢
此二種ハ東寺観智院よりかりしたり平治物語
二冊古き写本にまじりてあり普明国師
行実大幢国師行業実一冊韓使僧答日録
後集一冊南禅寺方丈記一冊務地の浅きまゝ
にて下総佐しても月ことに此本あり其本
四季物語二冊僧の偽書なり三十六人集一冊

是ハ新古今続古今新続古今風雅集の序名
序を訓点つけたるもの奥書ニ右入道前内大臣逍遥院
之和點也可秘之除古今集序之間以道業写
三古風集可深秘者也天正第十八庚寅唐織八親齢
奏四歌山花薄葉などあり歌山花薄八道律抄の
作者東光院の関白又九條禅閣などの中逍遥院
内容の抄録にて作りたる奥書別自筆にてあり
安家物語一冊古今集序又同書一冊福富草紙
子項一冊関家記一冊敏信書一冊奥書に此頃相伝
ことなれけき作者我々歌世にあれ権中納言

丙申冬節ニ能く模古一冊所要ニ出く讃云二十時
享禄癸年十二月十二日書之畢とあり大学注并
塔所々書之知簿一冊画所領土佐氏の家譜一冊
正平板論語五冊并我朝本ニ清原枝元綱信
よりて版元之郎 金吾にさゝけし訓点を寛正五年
に刊刻の版木をもとつゝし本なりさてこの校文流の
旧和とみしことありし丈とふ名字の形も出と称
に見人もあらへて此知には大尾に学古郎従稿法
目下逸人無質書とありてそのつかし異和あて伝ふ
やうちうハいつまて見ん無ん やりふつしきを也堺

浦道祐居士も家蔵本見出伝ハりしそて 勝負手如し
よりて告給如まことハちの本の要よろしくて記載あれ
周易王弼注二冊古きうつしとて伝ハり又三冊写しハ
板本也跋云閑室大禅師老壮歳入東関読易
六経百品論之講説之既称学校之名年
兼学歌川洛湯伝中学法要経室門極品愈
曰儒釈兼并也須学大取宇源氏康公請命印行
周易之志要取要点由百年能校正之再差而
加陵治明古義王弼韓康伯注集為大成本并上下略
慶長十年星集乙巳孟夏初五日庚戌西笑史

兼光と共の閑室とハ足利学校第九世三要和尚
のなかりほの中に重言を載てありなし
二部ともに繋辭説卦略例ホハなし孝経ハ是と
れハ弘安年中よりきたる本藤原ノ群か物をの
てうつしぬ孔伝なきにとも序なし又一冊ハきハ
直解とそ孔安国か序よ但ありなかり弘安云宮
此書ハ隷古の文字ありて又紀四書微八冊明の
夢菴編集なりいりし年物裁にゝ論語微ハ皮
序よあるかの字微の中より論語部をぬき
出て自作のよし被露ありとりそしるべし

かゝる本人間になきものハ此校すべきよすがなる
べしかゝるものをしりてをくべきものハさらにありぬべし
なかりけり柳本の本此経微といへる名ハさき
なく覚仲か裁注か微の名といへりやあるハ永和
板編五見一冊和漢合運に南宋の理宗乃
淳熙四年に繁臺馬仲虎撰編年通載とみえ
元年なりしなるべし永和第二丙辰季冬新刊絃重刻
于洛之大用庵とあり大用庵ハ大徳寺の塔頭
なり揺曼硯詩集一冊儒釋質疑論一冊是も
朝鮮板にてすなはちその国の人此抄るものや識

久しく人の承く見る所の絵図ハ大和国一幅これハ
笠木よそは清滝村の農家にありしをうつし
此板本より大よ異なり又一幅板本なり山城
国一幅摂津国一鋪金沢此一幅三河国一幅宗
良国一幅是まてハ皆印本なり広招提寺
金堂の図一張これハ平城宮の朝集殿をうつし
唐貝牌の考為図なり調度ハ烏帽子三
ツつミも古様とて枚革笑縫の象よりつくる
かゝるものその内一ツハ御遷幸の砌供奉れ
あらふうて叡感にあつかりしといふ所の折節一ツ

其余も同し時供奉ありしもの也古き杉挂
一筒これ持ハ御不して開ひらきしくふなり蒲
葵扇一柄これもなりたるの蒲葵ハ車にもちゆる
うなりし持は宣旨の内図一張方四寸六分深
二寸五分許あり底のうらに左右の側に宣の
字篆文りてあり
京を去りて納府出んとせしなり夜ふけ
行つゝやいとこ野辺のそとより清見かほとこ
小河しまてつくへは別のみにて駿河国清見
日本寺の清流すりてこゝをえらつ継ハ高あへて

ことよし此くさり称け嶂て妙鐘浦海中
より出現をしといふさしやうなる故よすり金道
ハつきもおもふかたけ迄とみえしまたにさゝ
めり元亨元年十二月日前堂首座全傑、都
管景等、都寺景照、維那法音、西單寮妙
崇、東單寮崇光、住山興伊、永徳二年十二月廿
五日、下野州佐野庄堀籠郷、應龍山天寶禅寺
住持沙門大朴玄淳、大檀那中務尉藤原朝臣道
義堀籠宮内左衛門尉源有元、大工甲斐権守卜部
助光沙彌行阿、沙弥道慶、とあり

古量考

鈞升 法隆寺綱封蔵にあり銅にて造る神形にて四孔あり　其大サ六寸受一石四斗と見えりてまたその附の物也といふ

口径弐尺弐寸伍分深壹尺肆分胴廻漆尺捌
寸参分今の升にて陸斗肆升入今の秤にて
参貫参伯匁ありしかと壹石肆斗にはまたハ
壹升ハ肆合伍勺漆抄壹札肆圭強となる物
部茂卿山田宗俊等の説によりてハ隋唐の度
を以て造る口ハ隋の壹升ハ今の参合弐勺肆
撮伍にて當りて唐の壹升ハ今　肆合壹勺捌撮
肆肆ありといへ宗俊ハ隋唐共に肆合壹

匁捌抄肆撮肆にあたるといふ大宋の時の秤
なりといふ論によりてみれハ隋量なるべきも
こと今なる市ふそハ必その世の秤とおなし
き證もなけれハかの箇乃定まて古き秤と
半なりしハ大宋の時といくたのや参貫参
佰匁を廿六にわけて壹佰貳拾陸銭玖分
貳釐参豪零漆忽叁微強となる物部觀
山田宗俊の説によれハ隋唐の秤にをし
欽ハ隋の壹斤ハ今の壹佰肆拾貳銭貳分
貳釐貳亳貳不盡唐の壹斤ハ今の壹斤と

同壹佰陸拾銭にあたるといひ宗俊ハ隋唐
共に今の壹佰参拾六銭捌分にあたるといふ
是らの説にハ肆匁許のたがひあれども此
量唐よりくだるべしともみえされハ是をも
て一列の考にも備へきものや秤もまた同し
かるべし

木升
同上本のりて造るといさしの器にて
ちりに竹井てあり是も大宋の時の升也といふ

方玖寸漆分深参寸漆分今の升にて伍升参
合漆勺零壹撮入是もすこし古きといひと古く
みゆれどもなほその世と時をさだめ難き證

もろ〳〵の升の制も何れも是にひとしかるへし

金伏升 薬師寺法用供米出納 今にいふ升とおなしと云

方肆寸肆分深貳寸零伍釐今の升にて陸合

壹勺貳抄貳撮入 寺僧ハ陸合陸勺とあるといふ

段銭升 同上

方肆寸陸分深貳寸伍分今の升にて捌合

壹勺陸抄零壹圭入 寺僧ハ八合入といふ

油升 興福寺南圓堂

方伍寸貳分深叁寸今の升にて壹升貳合

伍勺壹抄叁撮強入

長合升 南部街道玉水驛の南平尾村庄屋岩崎平蔵所持 天正七年卯三月吉日長合重○とえりてあり

方肆寸陸分伍釐深壹寸捌分今の升にて陸合

壹勺柒抄微強入なし此升ちやうちんある

竹まて鉄あつてこれその竹のあつさ壹分

ならしもまた之し此ハ深壹寸玖分伍釐にて

陸合伍勺微強入

宜字升 愚按するに是なる後三條院の御定にや裏に側に宜の字 回 まの焼印あるよし 藤貞幹か集古図ニ載する所と同

方肆寸陸分深貳寸伍分今の升にて捌合

壹勺陸抄微強入

内侍所升 裏に元亀元年八月廿四日内横五寸内立貳寸五分御内侍所 之してあり側に宮文字ありとあれとさ最久の焼印あり

今の升にて玖合陸勺肆抄強入一説に是を
古章と云

太孝升 側より底へかけて（印）焼印あり
方貳寸玖分深壹寸肆分伍釐今の升にて
壹合捌勺捌抄強入内侍所の升とすとし
是あまともその貳合入るや

嗣字升 底と左右の側とに（印）焼印あり
方貳寸深壹寸肆分伍釐今の升にて壹合
陸勺參抄微強入

民部省厨升 底に民部省厨 側に拾合と焼印あり
今の升とおなし

山科升 裏に一文字 側に片一又一方に久一と えりてあり
今の升とおなし